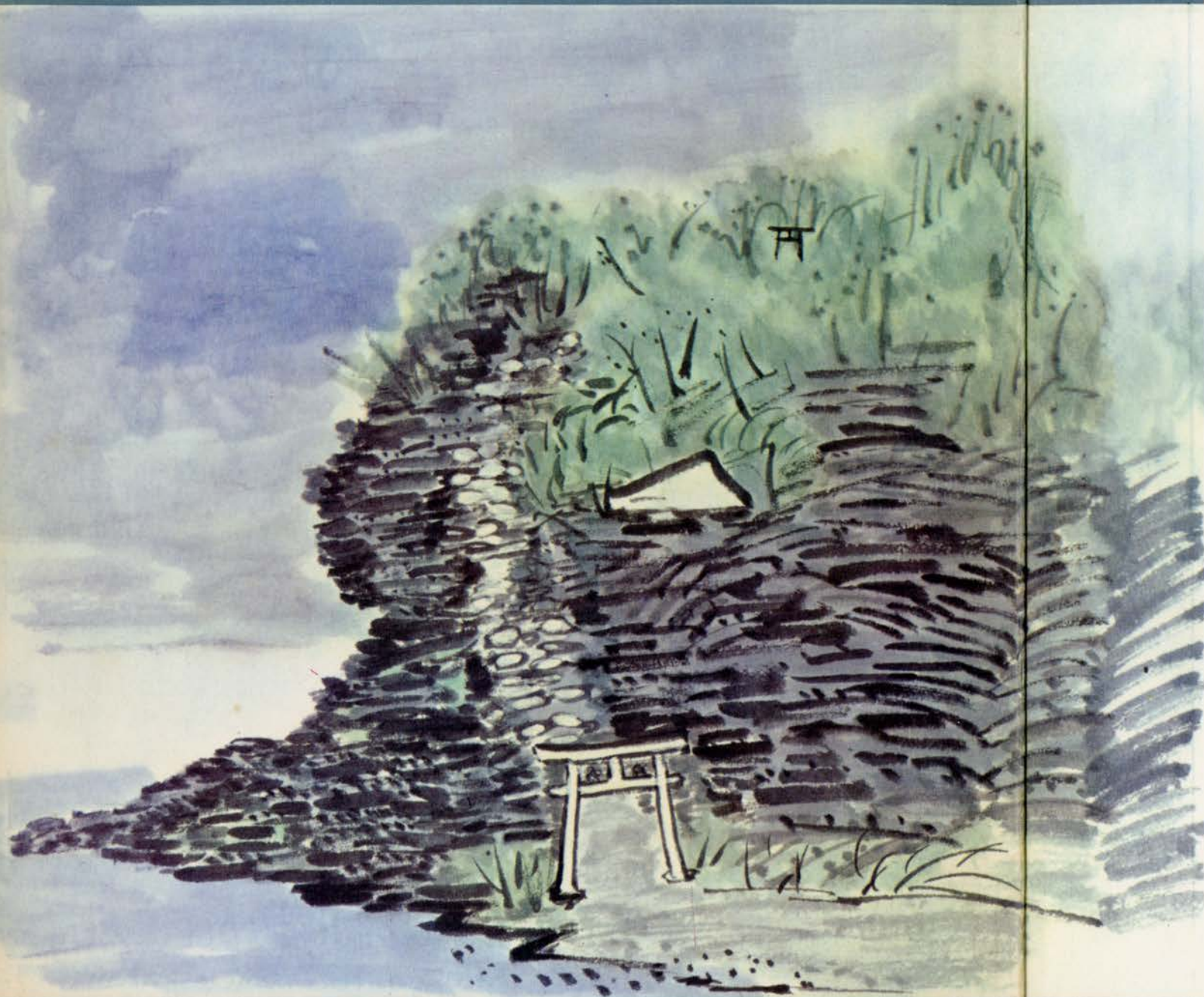


沖ノ島

I

宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和44年度調査概報



宗像大社復興期成会

題字 宗像大社宮司久保輝雄氏

題画 山本造園主 山本政東氏

沖ノ島

宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和44年度調査概報



宗像大社復興期成会

沖ノ島

宗像大社沖津宮祭祀遺跡
昭和44年度調査概報

宗像大社復興期成会



空から見た沖ノ島

序

宗像大社の御祭神であります宗像三女神は記紀にあります如く天照大神の御子神でありまして、大神の御神勅を奉じて天孫降臨に先立ってこの宗像の地に天降り、天孫の肇國の偉業をお助けし、皇室をお護りして平和な国を築き、その安泰を守護するという国民道の鑑を示されて宗像に鎮座し、世々皇室をはじめ全国民の篤い尊崇を受けてこられました。

このことは日本書紀より三代実録に至る六部の国史書その他の歴史書の各所に宗像大神勅祭の記載があり、又京都御所内に延暦14年頃に皇居鎮護の神として宗像大神が祀られ、今日全国津々浦々の6千2百余の神社に宗像大神が奉祀されていることでも明らかであります。

その総本社であります宗像大社は福岡県宗像郡玄海町田島の辺津宮、海上11軒にある大島の中津宮、60軒沖にある沖ノ島の沖津宮の三社からなる規模雄大なお社であります。

本期成会はかねてよりこの宗像大社の御復興の一事業として社史の編纂を進めておりますが、昭和29年5月沖津宮の調査の必要を感じましたので、玄界灘の神島として古来深い崇敬と信仰を受けております沖ノ島に学術調査団を派遣いたしました。その折はからずも千古不伐の森巖なたたずまいの沖津宮周辺の巨岩地域に古代祭祀遺跡群が発見され、爾来昭和33年9月までに第1次、第2次合わせて5回にわたり調査を実施いたしましたところ、この遺跡群は出土した歴大な量の豪華な祭祀遺品と出土の様子よりして、4～6世紀に大和朝廷によって国家安泰の祈願をこめて国をあげて営まれた大祭祀遺跡と判断されました。

この調査の結果は昭和33年と昭和36年に本会より発行しました「沖ノ島」「続沖ノ島」にて報告いたしましたとおりであります。

その後各方面の調査研究の進展に伴い沖ノ島を再度精査する必要を生じたので、本会においては関係各位の御了承と御協力をいただいて昭和44年

4月より現地の設営と測量を進め、10月初旬に第3次第1回の本調査を開始いたしました。10月中旬には三笠宮殿下が現地を親しく御視察になられ、調査隊一同に御激励の御言葉を賜わる光栄に浴しました。調査は連日奮励する隊員一同の敬神の念と、親和の心の発露に大神の御啓示があつてか、順調に進捗し、未発見の遺跡、貴重な遺品が次々とあらわれ更に祭祀の時代の幅も大きく拡がり、国史書に見える勅祭の場と想定されるまでに遺跡の姿は壯嚴雄大なものとなってまいりました。

本会といたしましては、この遺跡を精査して悠久の古より世々朝野をあげて宗像大神をお祀りした姿とその心を把握し、わが国体の精華であります神と皇室と国民の三位一体の深遠な往古の歴史を明らかにし、以て宗像大神の御神徳を宣揚申し上げることにこそ大社復興の真の意義があると存じます。しかしながらこの調査は遺跡の規模の雄大さと意義の重要なことを考えますと一復興期成会の事業の範囲を超えた、まさに国家的大事業でありますので、今後一層の努力をはらって慎重な調査を継続実施する所存であります。何卒関係各位には変らぬ御指導御協力の程お願い申し上げます。

なお沖ノ島は何分にも浪荒き玄界灘の真只中にある交通不便の孤島であり長期滞在し調査を進めることは非常に困難な現地の環境でありますので、調査は毎年天候不順な時期を除いて春秋2回実施することといたしましたので報告の完成まで今後相当の年月を要するものと存じます。

従って各回の調査の内容はその都度概報を作成することとし、今般昭和44年4・5月の予備調査及び10月の第1回調査の概報を作成いたしましたので御高覧賜りたく存じます。

昭和45年8月1日

宗像大社復興期成会

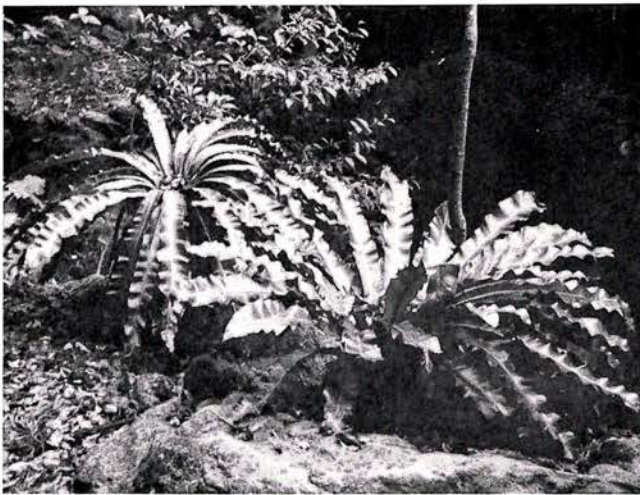
会長 出光佐三

目 次

I	調査再開にいたるまで	2
II	調査生活の記録	5
1	第1回予備調査(昭和44年4月2日～7日)	5
2	第2回予備調査(昭和44年5月8日～28日)	7
3	第3次第1回沖津宮祭祀遺跡調査 (昭和44年9月28日～10月20日)	9
III	大島・沖ノ島について	13
IV	祭祀遺跡の調査	18
1	調査地域の選定	18
2	祭祀遺跡の構成	18
3	6号遺跡	22
4	5号遺跡	27
5	正三位社前遺跡	30
V	調査の記録写真	31
1	6号遺跡	31
2	5号遺跡	37
3	正三位社前遺跡	41
VI	主要遺物とその解説	43
VII	おわりに	66



沖ノ島の全図



おおたにわたり



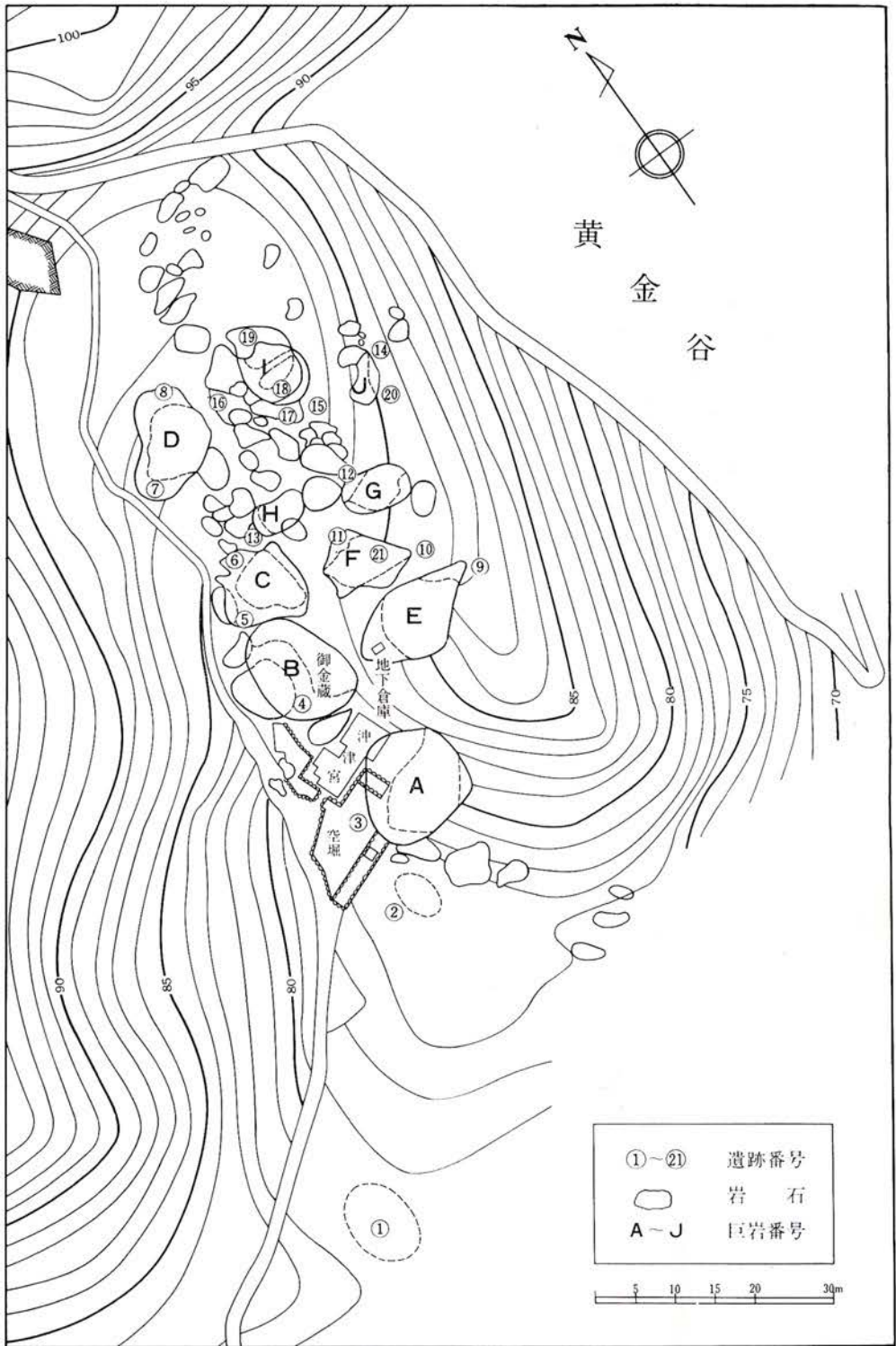
空から見た宗像大社

I 調査再開にいたるまで

沖ノ島は玄界灘に浮かぶ絶海の孤島で、東西約1km、南北約0.5km、周囲約4kmで、その中央の一の岳は海拔243.1mをはかる。晴天の日には西方には対馬・壱岐を、東南には大島や宗像本土を望むことができ、明治38年5月27日の日本海々戦は同島沖で行なわれ、当日の大社の日誌に海戦の詳細な目撃記録があるのは有名である。この沖ノ島は宗像大社の御神域で、その西南中腹の原始林の中に大社の沖津宮が祀られており、その崇敬は悠久の古より現在にまでつづいている。

この沖津宮附近に古代の祭祀遺跡があることは江戸時代に貝原益軒が記し、青柳種信は実際に島に渡って踏査し、明治・大正時代に江藤正澄・柴田常恵氏らが注意したところであった。戦前には田中幸夫・豊元國氏らの調査があり、この島の重要性が確認されていた。

昭和29年宗像大社復興期成会の一事業として社史の編纂が行なわれている際、沖ノ島の現地調査が企画され、この年の5月と10月に小島鉦作氏が団長、鏡山猛氏が現地主任として調査の任にあたり、古代祭祀遺跡は沖津宮を中心に南北にわたって集団になっていることが明らかにされた。昭和30年6月には船着場のすぐ上にある社務所前の僅かな平地の遺跡を調査し、10月には遺跡全般の写真撮影・地形図の補正を行ない、これらの成果が昭和33年3月「沖ノ島」として刊行された。

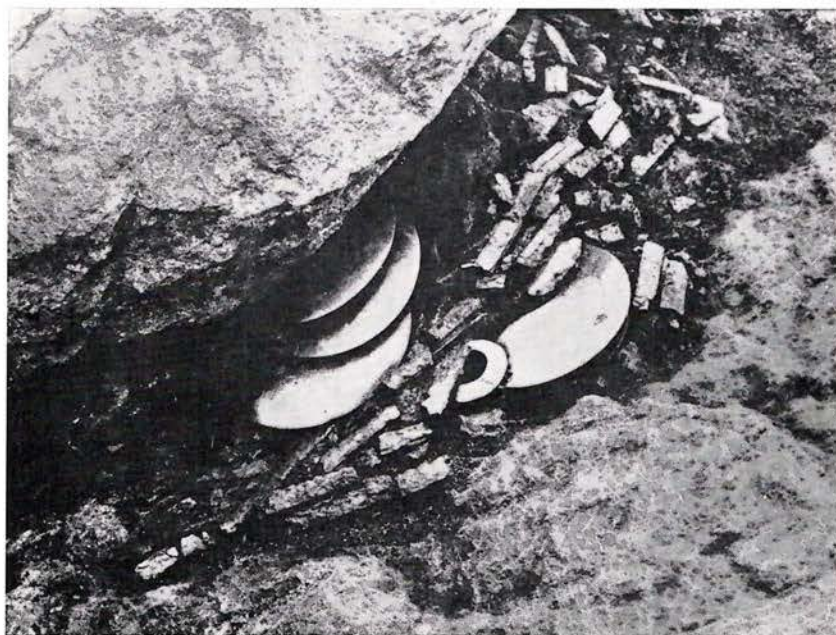


沖津宮周辺の祭祀遺跡図

昭和32年8月及び翌33年8月には第2次調査が行なわれ、前回未調査であった8号遺跡の調査と巨岩群の最も高所にあるI号巨岩のまわりの16、17、18、19号遺跡の調査が行なわれた。17号遺跡からは石釧・車輪石などの石製品や鏡21面などが発見され、この祭祀は4世紀末より5世紀のものと想定された。この調査の成果は「統沖ノ島」として昭和36年刊行された。

沖ノ島の祭祀遺物は玄海町田島にある宗像大社辺津宮にうつされ、国宝として一括指定を受け、現在辺津宮内の宝物館に収蔵展示されている。

第1次・第2次調査以降、十数年の歳月が流れ、時折沖ノ島出土と称する鏡や石製品が福岡市内にあらわれることがあり、われわれの心を痛ましめた。又宗像本土も急速に開発の手が進められ遺跡のあらわれることが少なくなかった。神湊・奴山・須多田より宮地嶽に至る前方後円墳群は宗像の古代豪族、宗像君の奥津城と考えられるもので、この学術調査も開発に先立って是非実施しなければならないことである。こうした状況の中で沖ノ島の学術調査が新たに各方面より要望されることとなった。宗像大社並びに本会としては御社殿の修復、御神域の拡充整備計画と並行して再びこの問題をとりあげ、文化庁・福岡県・福岡県教育委員会その他関係各界の御了承を得て宗像大社、九州大学文学部考古学研究室、鹿島建設、出光美術館、その他の関係者と相寄り宗像大社沖津宮祭祀遺跡調査隊を結成し、隊長として岡崎敬、副隊長として小田富士雄・松見守道があたることになった。



17号遺跡における鏡・刀剣・石釧等の出土状況(第2次調査)

II 調査生活の記録

1 第1回予備調査（昭和44年4月2日～7日）

このたびの予備調査は測量・資材・設営の準備を目的とし、本会より理事出光泰亮、宗像大社より宇都宮・斎藤両神職、鹿島建設九州支店より日隈・吉村・岩本、出光興産より小野、出光美術館より松見・末松(直)が参加した。松見は新たに考案した電波金属探知機を試験のため携行した。

4月1日大島に渡り中津宮にて渡島の祈願祭を行ない、翌2日未明漁船にて大島港を出港し、荒浪にもまれて10時すぎ沖ノ島に到着した。直ちに慣例の海水による「みそぎ」を行なって中食、少憩後沖津宮に参拝し、引続き地形の探査を行なう。船着場すぐ上にある社務所横より原始林を分けて西南端の柏崎の鼻・時化知らずに到り、そこより東北進して大麻畑の谷を越え、急坂を上って沖津宮附近の祭祀遺跡に出る。更に落葉に埋れ崩れかかった細い道をたどって頂上の燈台に上る。下りは通称奥の院と呼ぶ巨岩の下より祭祀遺跡の東側を流れる黄金谷を下る。巨岩累積する間を這い登りすべり落ち、原始林の中を悪戦苦闘して海岸にたどりついた。

3日は夜半より吹き出した雨まじりの風の中を前日と同じく柏崎方面及び祭祀遺跡地域を探査し測量範囲の概略を決める。

4日は離島の子定であったが、前日来の風雨はますます強くなり、遂に迎えの船は大島を出港不能との無線連絡が燈台経由で入ったので、調査を続行することとした。午前中は黄金谷の巨岩群を踏査し、午後は大麻畑の旧陸軍守備隊兵舎跡を調べ、谷間の巨岩群を登って沖津宮にたどりつき、午後4時過ぎ全員疲れ果て、5号遺跡前の路上で休憩をした。携行した電波金属探知機は度々試験を行なったが、何分にも試作品のため使用法にもなれず、調子も悪かった。たまたまこの休憩中に前回の調査に参加した宇都宮神職が巨岩の蔭で行なわれた古代の祭祀形式について語りはじめた。その話にひかれるように、又小野の5号遺跡で試験をしてみてもとの勧めもあり、松見が探知機の調整をやり直し、何かに魅せられるように道路すぐ傍らの岩蔭の地表に探知機のリングを当てた。しばらく探知を繰返していたが、突然探知機のメーターが反応を示し、レシーバーに大きな音がした。全員ハッとして腰をあげ、日隈が更にレシーバーを取り音を確認した。数ヶ所の中で最も反応の強い個所に吉村が竹筥を突刺したところ、腐蝕土の下に確かに手応えがあった。静かに周囲の表土を取り除いて行くと深さ20cmのところ、薄暗い岩蔭に金色燦然たる龍頭——その時



偉力を発揮した電波金属探知機



金銅製龍頭の出土状況

は金の鱗と思った——が現われた。探知機を当てると隣接個所にまだ反応があり、掘り上げると同型の龍頭が更に一個現われ一対となった。一同息をのんで声もなく唯驚くほかなかった。

今回の予備調査は資材・測量・設営に関する下調べで、発掘調査に関しては一切行なわない事を原則としていた。天候悪化のため迎えの船が大島出港不能となり離島が延びたことといい、電波探知機の調子はその時にたまたま正常に戻ったことといい、単なる偶然の重なりではない何かがあってこの龍頭は出現したとしか考えられなかった。

考古学関係者がいないため、この龍頭の処置を如何にすべきか相談を行なったが、この出土は調査の再開を急ぎ具体化する重要な資とせよとの神意の顕れと感じたので、神に感謝しつつその出土状況を写真に撮り、龍頭を採り上げた個所には埋没状態の判るように夫々に竹を埋めて辺津宮までお移しすることにした。

5日、6日は依然として風は吹き荒れ、迎えの船は来ない。やむなく宿泊設備、炊事場食堂等の整備を行なった。2泊の予定が4泊となった為に携行した食糧も底をつき、米は避難中の漁船に分けて貰ったが、副食は漁船が出漁出来ないで魚は分けて貰えず、罐詰もなくなったので、山に入ってふき・つわぶき・きくらげを採り、やまごぼうを掘り、醤油が無いので塩で煮て作った。動物性蛋白質がないので島の唯一の住人？であるオガチ(オオミズナギドリ)を食う話が出た位であった。

この分では風が止んでも当分はうねりの為大島から迎えの船が来るのはむづかしいと判断し、風のややかなぐのを待って避難中の漁船に頼みこみ、7日朝10時、沖ノ島を出発した。途中激浪に翻弄され、全員疲労困憊して午後3時すぎようやく神湊に辿り着いた。

2 第2回予備調査（昭和44年5月8日～28日）

このたびの予備調査は沖ノ島西南部の測量と、これに平行して同地域内における遺跡を探查確認することにあつた。

岡崎隊長、小田・松見副隊長以下学術班5名、宗像大社3名、鹿島建設4名、出光美術館4名、特別参加者4名の計23名が参加し、5月8日午前8時神湊を出港し11時沖ノ島に到着、資材食糧の荷揚げ、宿舎整理を行なう。



沖ノ島出土の細形銅矛
(致道博物館保管)

9日から全員で大麻畑、沖津宮、黄金谷一帯を踏査した。大麻畑の東にある旧兵舎跡の上にも巨岩群があるが、いまのところ祭祀遺跡と認められるものはない。戦時中この辺りに陸軍が駐屯し、兵舎などをつくっていた。その折に発見された細形銅矛は現在山形県鶴岡市の致道博物館に保管されている。大麻畑から社務所一帯にかけて黒曜石が散布しているが遺跡らしいものは見当らず、前記銅矛のこまかな出土地点も確認することは出来なかった。

社務所東側の無電塔から少し登った所に平坦部があり、ここに縄文土器片が散布している。社務所前の平坦地は一部前回調査し縄文・弥生式土器が出土しているが、このあたりは更に精査する必要がある。

船着場から社務所に上る迂回路の海に面した崖頭に鉄鋌と土師器があらわれているのを発見した。これは崩れ落ちる状態にあり早急に調査する必要がある。

島の西南端の柏崎の鼻では黒曜石片と磨製石斧が採集された。この石斧は手法からみて縄文時代のものである。往時「時化知らず」の呼称のつけられている所から少し上るとやや平坦地があり、ここは深く雑草に覆われているが、生活面のとれる場所である。5月23日には船で島を一周したが、島の

北側面は峻険で断崖が海にせまっけていて遺跡の立地には全く適していない。従って先史時代に島の西南部のわずかな平坦部に人々が住み、これは今も昔もかわらぬものがある。

巨岩の累積しているところは、島の西南側面の比較的傾斜のゆるくなった地域にあり、沖津宮を中心とした地域、黄金谷、旧兵舎跡裏の三つがある。黄金谷、旧兵舎跡裏は祭祀遺跡とみるべきものではなく、その中間に位置するやや平坦地のある沖津宮を中心とした地域が祭祀の場所として選ばれやすいと思う。

地形測量は5月10日より日隈が指揮し連日透視のきかぬ原始林の中をくぐり、崖をよじ登り、巨岩をかわして艱難辛苦の測量を重ね、5月23日までに東は沖津宮地域より西は大麻畑から柏崎の鼻まで約20万坪(0.66 km²)を兵舎跡の基礎をベンチ・マークとし縮尺 500分の1で完了した。沖津宮地域の巨岩地域その他の精密測量は本調査時に調査と平行して行なうことになった。



活躍する測量班員



5月23日までは大した風雨に会わず作業も順調に進んだが、24日は大時化となり作業も出来ず、25・26日と設営の撤収を行ない、26日は全員で沖津宮周辺、参道の清掃を行なう。

27日は日本海々戦の当日で、沖津宮の現地大祭日であったが、時化のため参拝団の渡島も取り止めとなり、全員宿舎で日和待ちをした。

5月28日午前10時半、漁船2隻に乗船し帰途につき、午後2時大島港に入港、中津宮神職宗像氏の出迎えを受けた。少憩後便船にて神湊に帰着、直ちに辺津宮に参拝し調査任務を完了した。

3 第3次第1回沖津宮祭祀遺跡調査（昭和44年9月28日～10月20日）

第3次第1回の祭祀遺跡の調査が昭和44年10月5日から開始されることに決まって、松見副隊長以下19名の先発隊が各種資材と共に9月27日出発の予定であったが、天候不良のため1日延期し、28日午前9時45分神湊を舟出した。海上は風はおさまったが、昨日来の余波がひどく、船は白浪にもまれて船には自信のある先発隊員も小さな漁船上で、必死になって荷ぐずれを防ぎ、いささかグロッキー気味となったが、午後2時すぎ無事沖ノ島に到着した。早速資材の荷揚げと設営にかかったが、今回は三笠宮殿下が現地御視察のため御来島になる予定なので、その宿舎準備の資材もあり、永大ハウスの職人4名共々荷揚げは時間を要し、作業を終ったのは午後8時すぎであった。



荒天をつき女界灘の荒海を沖ノ島へ渡る

翌29日から10月5日までは調査全般の準備が一瀉千里に手際よく進められた。給水・給食・就寝施設の準備をする者、携行したプレハブ住宅を建設する者、今回調査を予定した5・6号祭祀遺跡と社務所前縄文・弥生時代遺跡の調査準備や測量をする者等々、各自に与えられた任務に随って作業は進められ、秋の好天気にも恵まれて予期以上の成果が挙げた。

5日は岡崎隊長以下の本隊が来島する予定であったが、あいにくの時化模様となり出発延期の連絡が無線でもたらされた。空は青一色の秋晴れであるが、この時期玄界灘特有のモンスーンが吹き、海はいよいよ荒れ、一面の白波となって本隊の船を寄せつけそうにもない。遂に夕刻に至って本隊渡島の見込が立たないため、先発隊員だけで予定遺跡の調査をはじめ三笠宮殿下の御視察に対する準備をすすめよ、との無線連絡が本隊から届いた。6日7日と同様の時化が続き、本隊の渡島は引続き延期された。5日に離島予定の先発隊員中の8名は、7日沖ノ島築港工事の黒瀬組残留者と共に荒天について沖ノ島を去っていった。

8日久しぶりに荒天はおさまった。正午近く岡崎隊長以下本隊11名と西日本新聞社溝口記者が来島し、この船便で先発隊員1名が離島した。これでいよいよ作業は核心に入っていく態勢になった。

この日先発隊が調査に着手していた5・6号遺跡から唐三彩片・金銅製品・雲珠等の珍しい祭祀遺品が續々発見され、隊員を心から喜ばし励ましてくれた。その夜のミーティングはこれ等を中心に大いに話がはずんだ。

かくて9日10日と調査は滞りなく進み、10日には松本雅明氏・小田副隊長・柳田康雄氏が加わり調査は一段と威力を加えた。

11日は待望の三笠宮殿下御一行13名が海上保安庁の巡視艇「いそゆき」で来島された。海水でみそぎの後、沖津宮に御参拝になり引続いて頂上の燈台に登られ、随伴の老神職佐藤市五郎氏（82才）より、16才の折この望樓より目撃した日本海々戦の模様をお聞きになられた。下って5・6号遺跡に至り、長時間作業状況を御覧になり、更に宇都宮神職の案内で密林を分け、オガチの巣穴に足をとられながら柏崎の鼻・時化知らず・旧兵舎跡等諸所を踏査された。

殿下には狭い簡易宿舎にお泊りになり、毎食魚々々の単調な隊員の料理もおいとになられず、11・12日の夜は隊員のミーティングに御出席いただき有難いお言葉を賜わり、又同席の小山富士夫・松本雅明両氏からも有益な所見が述べられ、隊員一同の感激は一入であった。



5号遺跡を視察される三笠宮殿下

13日は未明に御起床になられ、山に登って日の出を迎えられ午前8時福岡に向けお迎えの巡視艇で離島されたが、その直前に棧橋上で隊員一同と共に記念撮影に臨まれたことは光栄の至りであった。

風の吹かぬ日のないこの玄界灘の孤島で、殿下御滞在の3日間は風もなく晴天が続き、恙なく御視察の予定を了えることの出来たのは只々神の御恵みと感謝した。

その後調査作業は天候に恵まれて順調に進捗し、多数の出土品に恵まれて10月20日まで続行された。社務所前遺跡から無数の縄文・弥生式土器片及び石器等が出土し、正三位社前の崖頭から九州ではじめての完全な鉄鋌が出土し、5・6号の祭祀遺物に錦上花を添えたことは長い調査期間における隊員の労苦に報いる大きな収獲と喜びであった。

かくて第3次第1回の調査は所期の目標を達成し、20日早朝沖津宮に詣でて漁船2隻に分乗し沖ノ島を離れた。帰路は少々浪にもまれたが積荷も少なく船足も速く予定通り神湊に帰着、午前11時より辺津宮にて報賽祭をとり行ない、恙なくその任務を終了した。



社務所横、縄文・弥生時代遺跡で岡崎隊長より説明をお聞きになる殿下



小山富士夫氏の唐三彩の説明をお聞きになる殿下、後は松本熊本大学教授

III 大島・沖ノ島について

宗像大社 宇都宮 淳
斎 藤 惇

宗像大神の鎮座地として古い由緒に富む宗像地方は筑前国の東北部に位し、本州から九州に入る門戸の要衝の一つに当たっている。この地方は古来宗像と称せられ、ほぼ昔ながらの境域を占め東西21.2km、南北21km、総面積174km²、戸数1万3千有余、人口約6万人を数え、行政上4ヶ町（宗像町・玄海町・津屋崎町・福間町）1村（大島村）に区画され大社の鎮座地は玄海町（辺津宮）と大島村（中津宮・沖津宮）にわたっている。

1 大島

大島は神湊より西北約11kmの海上にあり中津宮の鎮座地である。現在定期連絡船が神湊との間を1日夏7回冬6回往復し、海上約30分にして大島の波止場に達する。

東西3.2km、南北1.7km、面積3.7km²、周囲約15kmである。この島は次に述べる沖ノ島を併せて大島村と称する。従来内陸と離れていたため、諸事とかく不便で発達が遅れがちであったが、昭和28年10月離島としての島民の生活安定、産業の振興を図る離島振興法の指定を受け、電力は陸地より導入され、目下漁港の整備が進められ避難港が完成している。

島内は本村・宮崎・岩瀬・津和瀬の四区に分れており、北及び東海岸は断崖多く奇巖に富み、所々湾形をなしたところに小嶼がある。北西の突出したところを神崎といい、宗像大神降臨の地とも伝えられる奇勝地で、その後方の山頂に大島燈台がおかれている。北海岸で船着きのできるのは岩瀬だけであって、ここから本村までは島を南北に横断する道路が通じている。岩瀬の海浜近くの断崖の上には沖津宮遙拝所があり、天気晴朗の日には海上遙かに沖ノ島の神々しい姿が拝される。

大島は樹林うっそうたる岳陵地帯が多く、その最高峰は御嶽(217m)で、ここには中津宮境外攝社御嶽神社がある。島の山地は534町(5.3km²)農耕地は81町1段(0.88km²)で米穀以外は自給可能といわれている。島の南々西岸のほぼ中央に波止場がある。この附近を中西というが、島の主要聚落である本村はここから海岸に沿って東の方に存する。本村の東に宮崎の小聚落がある。全島戸数372戸、人口1,489人で、漁業190戸、農業169戸、残りが商業その他である。島民所有船舶は180隻で、沖ノ島附近への出漁が最も盛んである。

中津宮は波止場から西方300mの海浜にせまった丘陵の上に鎮座される。ここは海をへだてて宗像の山野を一望に収めることができる景勝の地である。境内北東の地つづき一帯を「ろくどん」というが、ここは旧境内と考えられ、祭祀遺跡が存し、御嶽への登山口に当たっている。



沖津宮の絵図（明治8年）

2 沖ノ島

沖ノ島は神湊より北々西60km、玄界灘のただ中にある東西1km、南北0.5km、周囲4kmの孤島である。一望千里の蒼溟の中にただ一つ屹立する森厳な島の姿は人をしてそぞろに神の宿りますこと感ぜしめずにはおかない。古代より今日まで神聖視され、一名不言島（おいわず）とも呼ばれているが、これは島の様子については口外しないとの意味であり、また一木一草といえども島外に持出すことを許さぬタブーが今日も守られている。

沖ノ島近海に出漁する大島の人々は、この神島に対して強い信仰を抱き、またこの島におけるいくつかの忌詞も伝えられている。沖ノ島に渡る人々は大島で潔斎しこの島に上陸するに当って海水で「みそぎ」をしなければならず、女人禁制は現在も変わっていない。

沖ノ島附近は西日本における有数の漁場で、県下や九州はもとより、中国、四国遠くは北陸地方から出漁するものも少なくなく、漁期には波止場近くに設けた小屋に起居する者もあるが、常時この島に居住する者は沖津宮奉仕の神職1名と、沖ノ島燈台の職員3名の計4名である。島の南西端に全島で唯一の船着場があり、この附近を御前（おまえ）と呼ぶ。昭和25年以来漁港築堤工事が行なわれ、波止場はほぼ完成している。

波止場から南東約1kmの海上に小屋島・御門柱みかどしらと呼ばれる岩礁がある。御門柱は二つの直立する岩からなり、沖ノ島の鳥居に見たてられている。

波止場を上ると「瀛津宮」の扁額のかかった一の鳥居があり、浜に沿って進むと崖下に二の鳥居があり、ここから急な石段を70段上ると100坪ほどの平地がある。ここに仮社務所があり、その海岸崖頭に正三位社がある。社務所横よりうっそうたる森林の中の急な不規則な石段を約300段登ると沖津宮社殿に至る。千古斧鉞を加えない原始林の中に巨大な奇岩・怪石が重畳し、幽鳥の声がこだまし、文字どおり神秘の霊境である。ここが古代祭祀遺跡地域である。

3 沖ノ島出漁古老の話

- | | |
|--------|---|
| 河辺嘉十郎氏 | 明治30年3月25日生、大正2年（16才）頃より沖ノ島に出漁し、昭和42年まで鯛網をされ55年間漁業に従事した功労で表彰され、なお永く沖津宮・中津宮の奉賛会長をされ昭和44年同会長を辞せられた。 |
| 山口賢七氏 | 明治34年4月30日生、大正3年（14才）頃より沖ノ島に出漁し4年間沖津宮詰船に従事し、昭和44年まで56年間巻網漁に出漁し、現在沖津宮・中津宮奉賛会役員。 |
| 丸井八五郎氏 | 明治36年6月10日生、大正7年（16才）頃より沖ノ島に出漁し、現在もお漁業に従事し、その年数は50年にわたる。沖津宮・中津宮奉賛会役員。 |

往時、沖津宮の勤務は常時、主典1名・雇員1名・使夫1名とその用に供す詰船1隻（船名は宮坂丸で代々詰船として従事した）。その乗組は船頭ほか2名であった。勤務日数は60日を限度として交代していた。なお燈台（当時は燈竿と称す）職員2名は30日を限度として交代しており、その詰船1隻（乗組員は船頭ほか2名）には代々大和丸が従事していた。これら神社・燈台の用をなす船を御用船とも称していた。

当時の船は帆もしくは櫓を動力とする和船（帆船）で、風次第では相当の速力も出たとのことである。これらの船は大別して3種に分かれ、4尺型（幅4尺2・3寸）約1屯、6尺型（幅5尺5寸）約2屯、7尺型（幅7尺以上）約4～5屯の3種があり、最大クラスの7尺型が御用船を務めていた。その船足は大島―沖ノ島の間を追風の時は4時間半～5時間櫓使用の場合は日没から日の出まで約12時間を要した。最悪の場合は一昼夜を要し船に交代で眠り、一晩中櫓を漕いだことは屢々であった。羅針盤は小型の磁石式で盤面の方位は干支で記されており、大島から沖ノ島に向う時は乾の方向に、沖ノ島から大島へは巽に進路をとり操船した。当時沖ノ島出漁の船は20隻位で、大島全体の所有船数は100隻位であった。

4 沖ノ島出漁季節（船は4尺型）

（秋・冬）10月～2月 100日位 乗員3名 釣及び延縄漁

（春・夏）2月～6月 120日位 乗員2名 釣及び立網漁

5 漁船の変遷（大島）

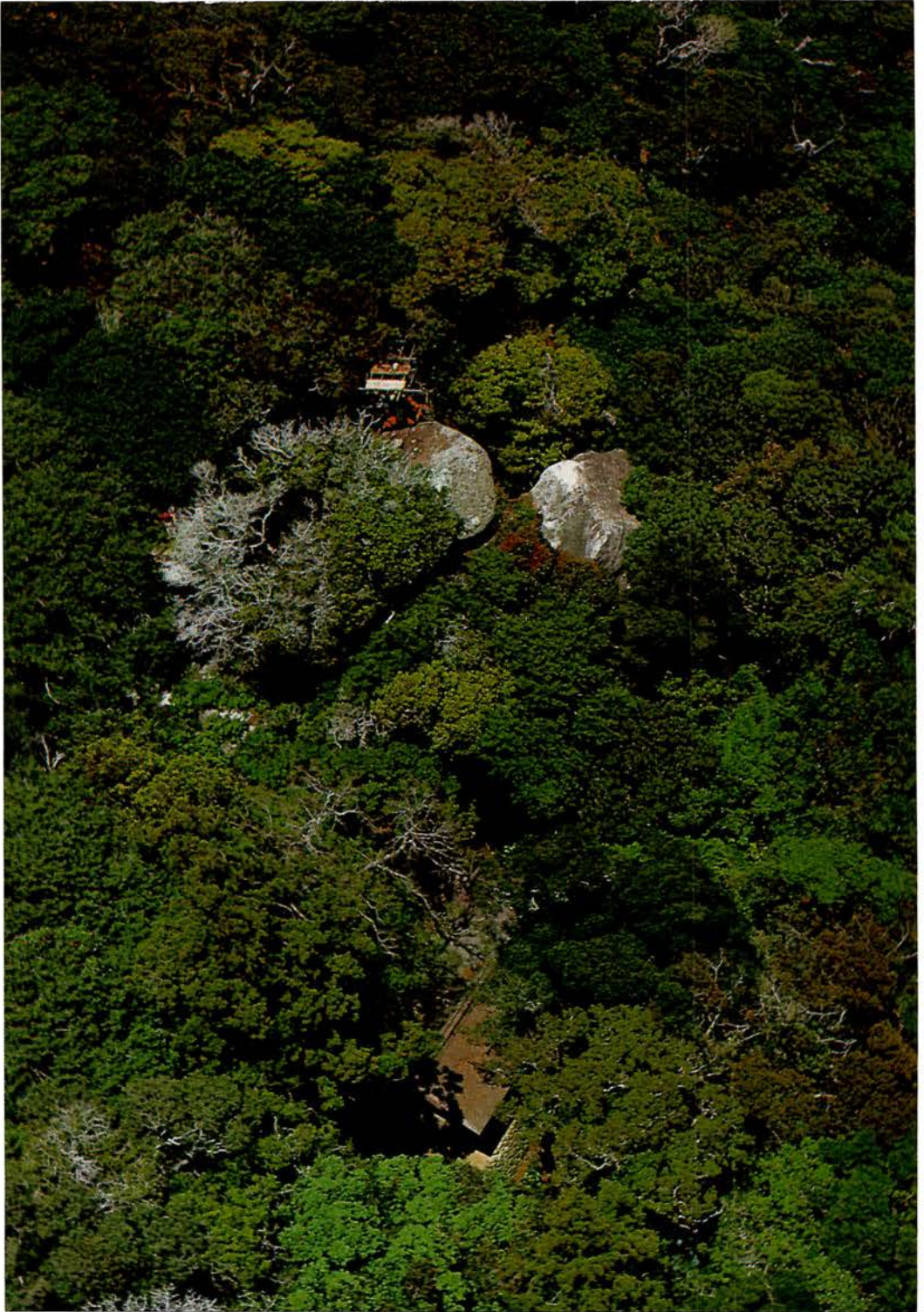
船種	年代	動力	速力	大きさ
和船 (帆船)	大正末まで	帆及び櫓	追風4～5時間 櫓 12時間	1～5屯
機械船	大正末より	大型焼玉	4時間半	4～5屯
	昭和23年	小型チャッカー	5時間	1～3屯
	昭和24年より現在	ディーゼル	3～4時間	15屯以内(幅11尺)

昭和2年春、河辺嘉十郎氏は磁石式小型羅針盤の伝馬船に乗り、6尺型の和船と2隻で沖ノ島に渡る折、午後1時無事沖ノ島に着いたが、先に着いていなければならない和船が着いておらず、大騒ぎの後、燈台より各所連絡の結果、対馬に方向を誤り漂着していた。又山口賢七氏乗組の朝日丸は大島へ帰る際、網が推進器(プロペラ)に巻きつき、動きがとれず、沖ノ島そばの小屋島に激突し、ようやく出航したが、壱岐の八幡港に漂着するなど、事故は頗る多かった。

このように大正末・昭和初期に船が機械船になっても、沖ノ島への渡海は困難であり、今日の進歩した漁船でも、少し風が吹き海が浪立つと渡海を断念せざるを得ない状態であり、古代にこの玄界灘の絶海の孤島沖ノ島に渡ることは、どのような船で渡ったものか恐らく想像を絶した至難の業であったにちがいない。



沖ノ島の避難港



沖津宮附近の密林と巨岩（下にみえる建物は沖津宮）

IV 祭祀遺跡の調査

1 調査地域の選定

昭和44年4月及び5月の綿密な予備調査によって巨岩群の祭祀遺跡は沖津宮を中心とする地域で、今のところ大麻畑や黄金谷の中には認め難い。先史時代の遺跡は港より階段を上ったところにある社務所附近にかたまり、島の南西部の柏崎の鼻にも磨製石斧や黒曜石が散布している。そこで今回は沖津宮附近の祭祀遺跡と、社務所附近の先史生活遺跡を調査することにした。

社務所附近の先史生活遺跡は橘昌信、黒野肇、与小田寛が当たった。この出土遺物は現在鋭意整理中であり次の機会に報告することにした。

祭祀遺跡は沖津宮より上にある5号6号遺跡を調査することになった。殊に5号遺跡では昭和44年4月の予備調査の折に金銅製龍頭が発見され、地表には鍍金青銅金具などが散布しており、これ以上放置しておくわけにいかないものがあった。

6号は松本肇・光枝房敏・中倉民男があたり、5号は佐田茂・伊藤奎二・柳田康雄・井上団平があたり、松見守道・阿久井長則が写真撮影を担当した。

発掘に際して岩蔭に鉄パイプの足場の枠組を吉村政義が担当したが、この設備は爾後調査状況の撮影、現場の照明その他に非常に役立った。

測量は日隈徹が予備調査に引続き担当した。

2 祭祀遺跡の構成

比較的緩かな傾斜をなす島の南西側に南北に流れる2つの稜線で作られた細長い谷地形の標高90mあたりにやや平坦な地域があり、そこに沖津宮社殿が鎮座している。この社殿から南に10m北に40mにわたって山頂方向より崩落した石英玢岩の巨岩が累々と堆積している。巨岩は高さ7～8mから10余mに及ぶものがあり、突出するあり、あるいは岩上さらに岩を架するあり、うっそうたる密林に包まれて昼なお薄暗い異様な環境をつくり出している。ふり仰げば亭々たる密林の梢よりなお高く突出した巨岩の白い頂が陽を浴びて明るく輝いて見える。古代の人々はこのような森厳な雰囲気をもたせられた巨岩のたたずまいに神秘を感じ、降神の依代（^{よりしろ}磐座）と信じてこの一帯にあい次いで奉獻品を捧げ重大な祭祀をとり行なったのである。

昭和29年5月から着手された第一次第二次調査によって奉獻品を埋蔵する祭祀遺跡19箇所が確認されたが、これらは沖津宮周辺からその北方にかけての巨岩上、あるいはその蔭に集中していて、前回の調査ではこれら祭祀遺跡に関係のある巨岩9箇所をあげ、A号～



岩上遺跡（17・18号）

I号の名称を附している。

沖津宮社殿北側のB号巨岩の下に一種の洞穴があり、ここから諸種遺物が発見されたので古来御金蔵（4号遺跡）と称されて知られてきた。ここから大社辺津宮に移されたものの中には漢式鏡、金銅製雛形織機、金銅製香炉状品などの優れた奉獻品があつて注目されていた。従つて近世以降は沖津宮の祭祀遺跡としてはこの御金蔵だけが大きく認識されてきたのであつた。しかしながら前回までの学術調査によつてその規模ははるかに雄大で、その初現は今までのところでは4世紀代にまでさかのぼることが明らかにされた。また今回の調査によつて祭祀遺跡が新たに発見され、21個所が計上されるにいたつた。

これらの祭祀遺跡はそのあり方から次の3種類に分類することができる。

(1) 巨岩上における祭祀

最も高所にあるI号巨岩を中心とする祭祀で16・17・18・19号遺跡がこれに属する。なかでも17・18号遺跡は漢式鏡や碧玉製腕飾などを主体としており、現在まで判明している遺跡の中では最古のもので4世紀後半から5世紀代にかけて奉獻されたものである。

新発見のF号巨岩上の21号遺跡もこれに属する。

(2) 岩蔭における祭祀

祭祀の場所が地上に下つてきて巨岩の蔭に奉獻品をならべて置かれた状態で発見される。前回調査の7・8号遺跡、今回調査の5・6号遺跡がこれに属する。7・8号遺跡では武器・工具・馬具・滑石製白玉などが主体となっている。工具・馬具のなか



岩蔭遺跡（5・6号）



露天遺跡（1号）

には朝鮮半島南部地域の古墳出土品と同類の将来品が含まれていて注目される。ほぼ6世紀代に行なわれた祭祀形態であるが、今回の調査では5号遺跡で7世紀から8世紀に及ぶ須恵器・土師器を多く奉献した事例が発見されて祭祀が歴史時代にまで継承されていることが確認された。

沖ノ島の祭祀遺跡の多くはこの岩蔭の祭祀に属し、3・4・9・10・11・12・13・15・20号遺跡が確認されているが未調査である。

(3) 露天における祭祀

巨岩の密集地域をはずれて1・2・14号のように露天の緩斜面に須恵器を主体とする土器を集積したような状態の遺跡がある。壺・甕・器台などの奉献土器がほとんど破片となって集積されており、これが祭祀の跡か、あるいは祭祀に使用した後に一括してこの場に集積されたものか後日の調査をまたなければ決定出来ないが、いずれにしても表面観察では6世紀後半から9世紀近くに及んでいるようであるから、岩蔭遺跡で発見されるものとの対比が必要である。

沖津宮社殿南側、A号巨岩下の3号遺跡は岩蔭と露天の両方の状態を備えていて、土器が集積されているが、遺跡の性格としてはこの場合に属するかも知れない。

以上のように沖ノ島の祭祀形態は一様でなく時代とともに変遷しているが、6世紀以降の状態に未知の部分が多く残されている現状である。今後はこの方面に究明の手を進めて現在にまで継承されている沖ノ島祭祀の歴史の実態を明らかにする必要がある。



調査中の6号遺跡

3 6号遺跡

沖津宮社殿前から燈台への道を登って行くと右手にB・C・Dの三巨岩がそそり立っている。C岩とD岩の間には平坦地がある。この平坦地の南端、C岩の北側の岩蔭が6号遺跡で、C岩の西南側が5号遺跡である。6号遺跡は5号遺跡より約1.5m高いところにある。

岩蔭は東西5.8m、南北3.1mの広さがあり、ここに祭祀の場をつくっている。C岩は高さ10.54mをはかり、その基底部より北に約50°の角度で立上っており、これが庇となっている。この庇の下の平坦部が6号遺跡で、西側が低くなり、現在5号遺跡の方に通じる穴があり、雨水は5号遺跡の方に流れる。

庇下の平坦部には、地山の上に小石をならべて祭壇のごとき遺構をつくっている。南北2.1m、東西3.8mの長方形のプランである。この遺構の外に0.8mの幅の溝があり、その外にさらに小石をならべて外よりの土砂の流入を防ぐ土留めの役割をしている。この溝の上はC岩の突出した庇の先端で雨落部となり、雨水が流れるためと、これをもって一つの区画となしたものであろう。

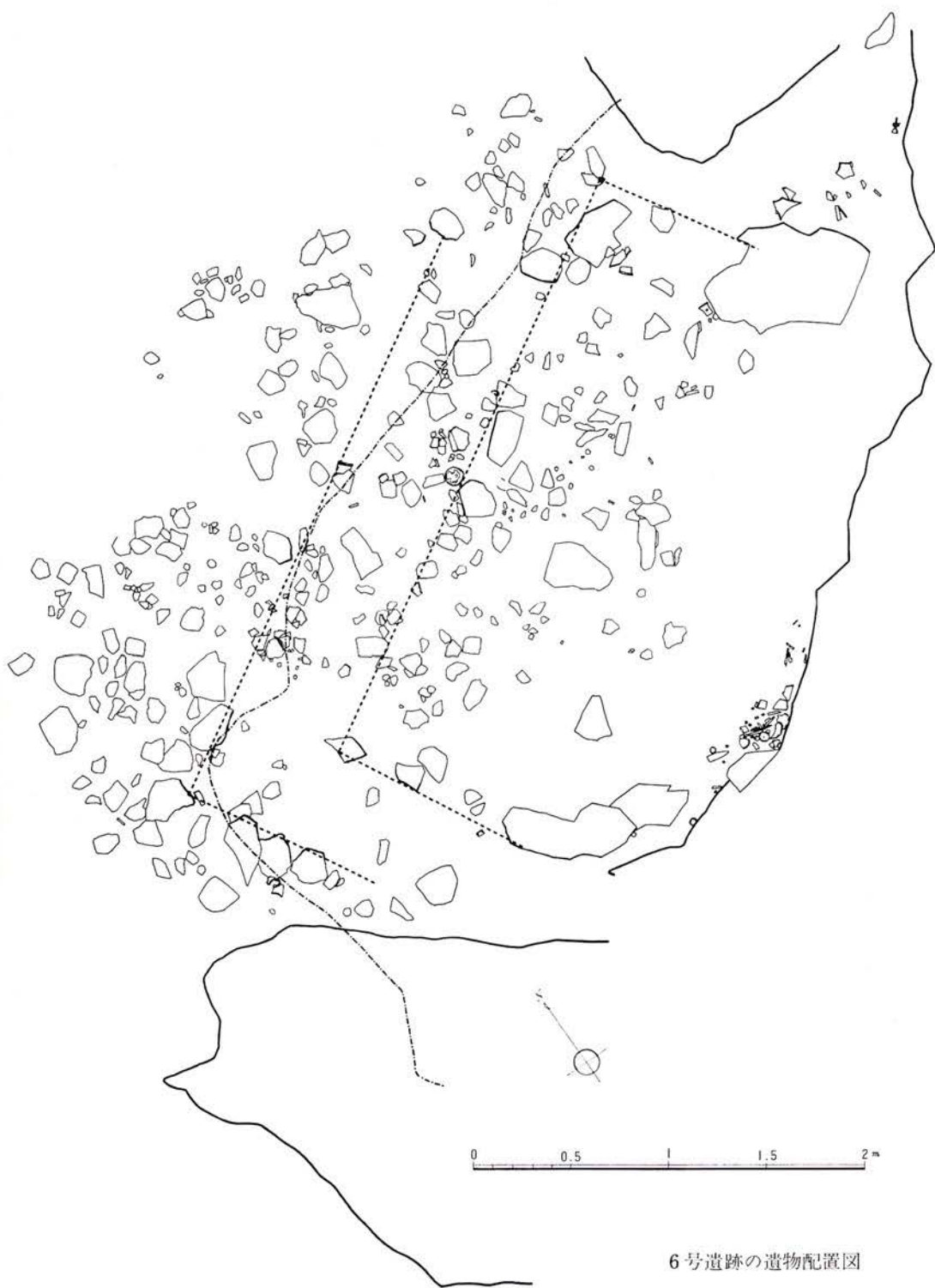
遺物は中央の祭壇状遺構の上に置いてあったが、降雨のはげしい時に土砂と共に5号遺跡の方に流れてしまったものもあろうし、古くから露出して持ち去られたものも少なくなかったと思われる。

西側には土師器の壺が、その東に器台が置かれており、鉄製品はかなり広範囲に散乱していた。この中に鉄鋌片4片が含まれており、幅5.5cm厚さ0.5cm復元長30cm内外と考えられる。金銅製の鉤や小形細頸壺、鉄製小鏡などは中央部巨岩に接して置かれていた。滑石製品の出土は少なく、形代の小形剣形品と斧形品がそれぞれ一個出土している。金銅製歩搖付雲珠は東側奥で発見された。この類のものは前回の調査で7号、8号遺跡から出土しており慶州・金冠塚などからも発見され、新羅よりの舶載品と考えられる。

出土の遺物を総観して、この遺跡で祭祀の行なわれたのは6～7世紀とすることができよう。

6号遺跡の主な出土品

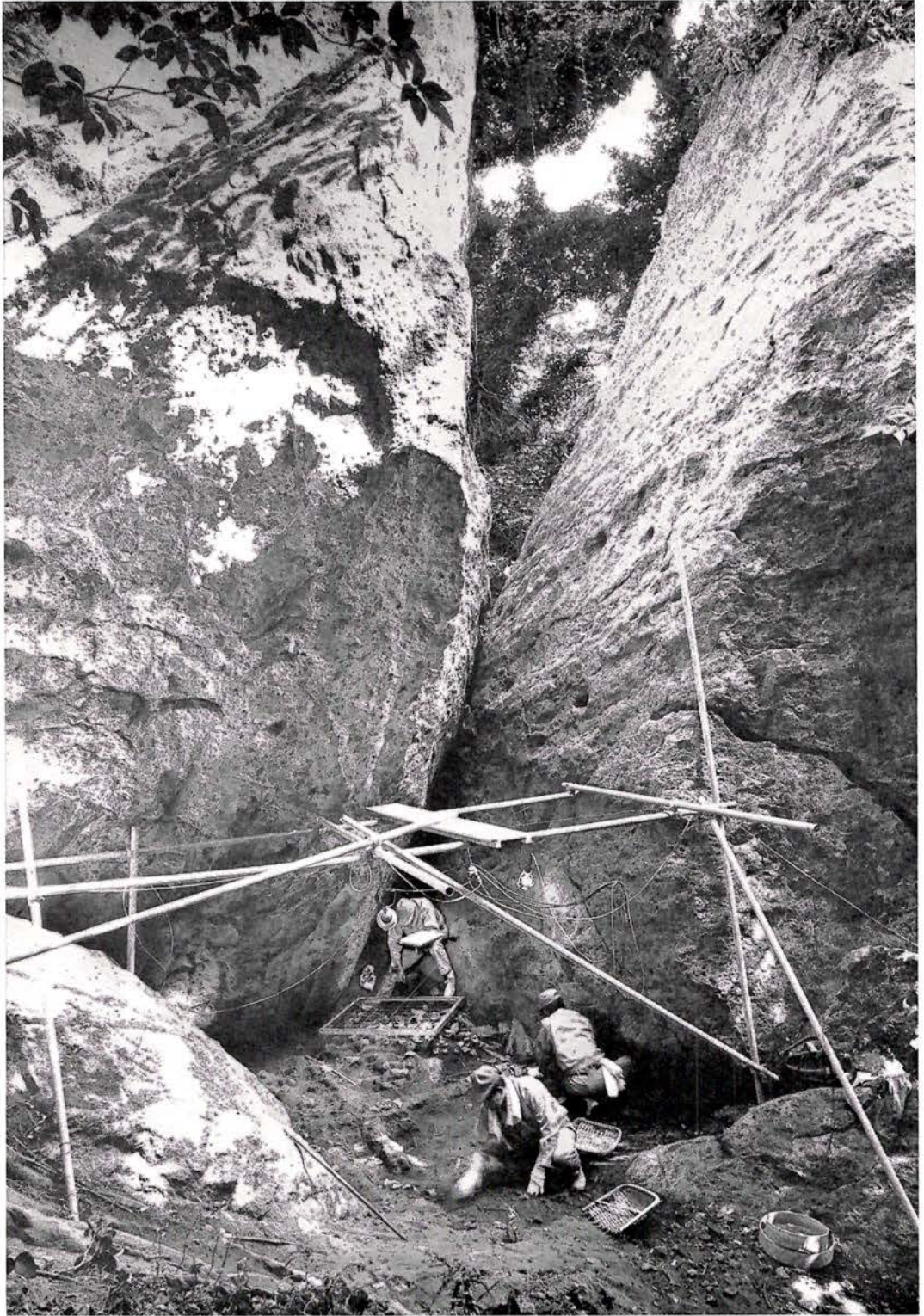
金銅製鉤・小形細頸壺 歩搖付雲珠
錐形鉄刀・刀子 鉄鋌片 鉄製くつわ
滑石製剣形品・斧形品・平玉・白玉
ガラス製小玉 鮑貝製装身具
土師器（大形壺・小形壺） 須恵器（器台）



6号遺跡の遺物配置図



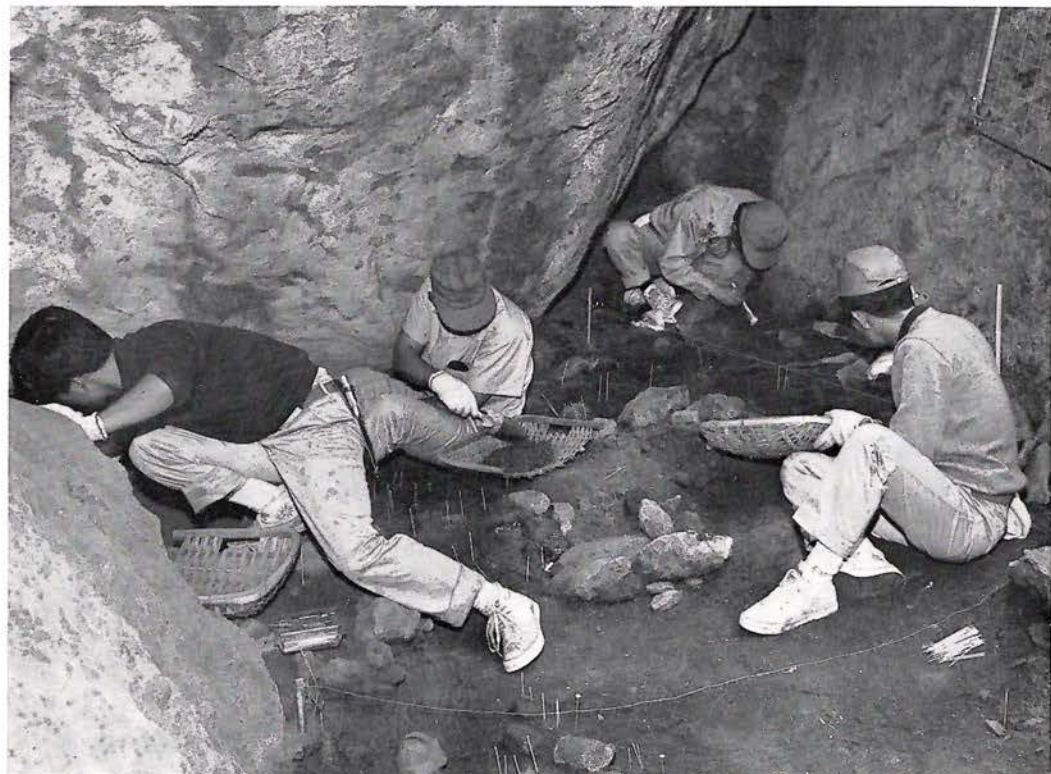
5号遺跡の遺物配置図

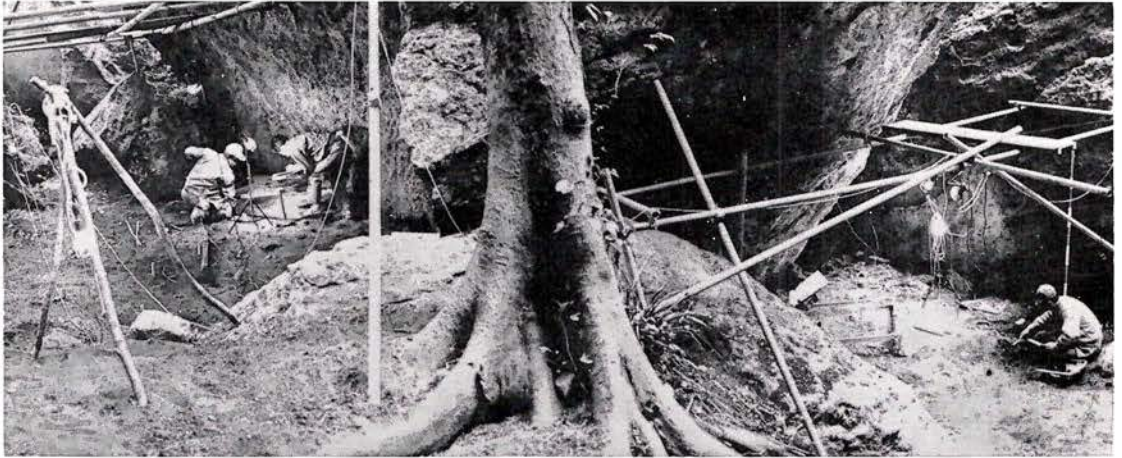


調査中の5号遺跡



5・6号遺跡の作業風景





6号遺跡(左)と5号遺跡(右)

4 5号遺跡

5号遺跡は4号遺跡(御金蔵)のB岩、6号遺跡のC岩、さらにC岩下の大石の三岩石にかこまれた長方形の平坦部にいとなまれたもので、C岩が奥壁となり、平坦部の上を庇状に覆っている。奥行約8.1m、幅(南北)約5.2mをはかる。

5号遺跡は6号遺跡より低く6号側の穴を通して上からの土砂の堆積も考えられるので遺物の中には6号遺跡からの流れこみを考えておく必要がある。地面上には特に施設は認められないが、須恵器が多量に発見された岩蔭南半部に平石が置かれていたようである。

遺物は平坦部全面に散らばり、須恵器を除いて原位置をとどめているものは少ない。金銅製小形細頸壺・同小盃は6号遺跡に通ずる穴の近くにあり6号遺跡からの流入かも知れない。須恵器は東南部に一括纏まってあり、出土の状況から当時の配列状況を復原することができる。

金銅製、銅製、鉄製の形代は破片かたしろとなって岩蔭の全面に散布していた。滑石製の平玉・白玉も同様に散布した状態で出土している。

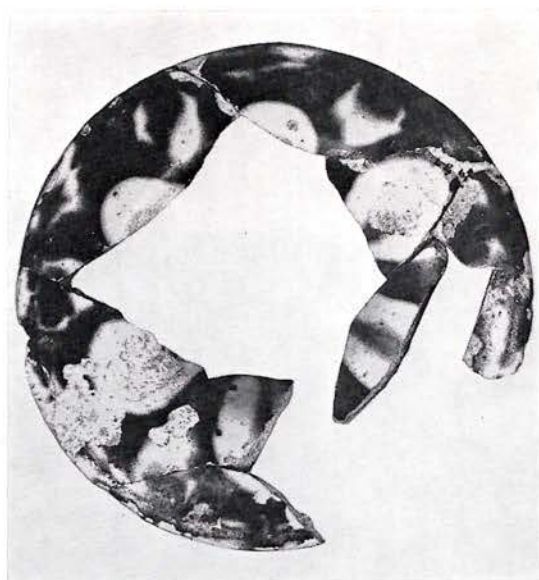
5号遺跡からは前に述べたように特筆すべき発見がある。それは金銅製龍頭であって、4月の予備調査の際、B岩のそば、中央よりわずか入口よりの所で一對発見されたのである。龍頭は向い合ったように置かれていたが、10月の調査の際に再び原位置に置き附近を調べたが、これに附属すると考えられるものは発見されなかった。しかし近くから金銅製品が多量に出土しているので、或いはこの中に附属するものがあるかも知れず、これは今後の研究に待ちたい。

次いで重要なのは唐三彩の発見であろう。これは5号遺跡の西側入口附近より奥壁近くまで小片になって散乱しており、計18片を採集することができた。この18片は接合すると

径 9.6cmの長頸花瓶の口辺部となるが、前回の調査時に7号遺跡で発見された4片もこれに接合する。同一個体の破片が約20mも離れた別々の岩蔭にあることは理解に苦しむところがある。

金銅製龍頭と唐三彩は別項に杉村勇造・小山富士夫両氏の解説があるのでそれによりたい。

5号遺跡出土の土師器・須恵器は6号遺跡のものと近似した形式である。この時期の祭祀の遺物が主体をなすものと思われるが、流れこみと考えられるものもあり、何回かの祭祀が考えられる。なお5号と6号を区画する岩の上面凹みから鍬形石が発見されたことは注目せられる。また明らかに中世以降の鉄製鱈口・鉄製三叉鉞、銅銭などがあり、古代の祭祀の場に中世以降になっても奉獻が行なわれていることが認められる。



前回の出土品とつながる唐三彩

5号遺跡の主な出土品

唐三彩 18片

金銅製龍頭 1対

金銅製小形細頸壺・小形盃・人形

鉄製小鏡・形代（斧・刀・刀子・矛）

碧玉製鍬形石片・車輪石片 硬玉製勾玉

滑石製平玉・白玉 ガラス製小玉

土師器（壺）

須恵器（器台・甕・長頸壺・高杯）

銅銭（宋銭その他）

鉄製鱈口・三叉鉞



正三位社前遺跡

5 正三位社前遺跡

船着場より20m登ると社務所前の平坦地に出る。その南端に正三位社の石祠が鎮座している。この祠は島の基盤をなす中世代粘板岩層の上に堆積した崩石土の上に構えられたもので、その南側は海蝕によって絶壁をなしており、波風にさらされているため絶えず徐々に崩壊している。たまたまこの崩壊しつつある崖面上端に土師器の小形丸底埴と鉄鋌が露出しているのを発見し、放置すれば今回の調査までには崩落し去ってしまう危険があったので応急調査を行なった。この遺構は特殊埋蔵遺跡で、旧地表から30cmばかり掘り下げた土壌を設け、その中に鉄鋌を埋納したものであった。土壌の大きさは壁面を十分確認することができなかったが、約70cm程度の径をもつ円形土壌であつたらしい。すでに土壌の三分の一近くは崩壊しているようで、また土壌の縁辺も崩れているので蓋石が壙内に沈下していた。壙内には撥形の鉄鋌8枚が横方向に重ねた状態で据え置かれ、一部はすでに割れ落ちていた。長さは18～20cmくらいである。また一枚の鉄鋌は20cmほどはなれた壙内に平たく置かれており計9枚となった。

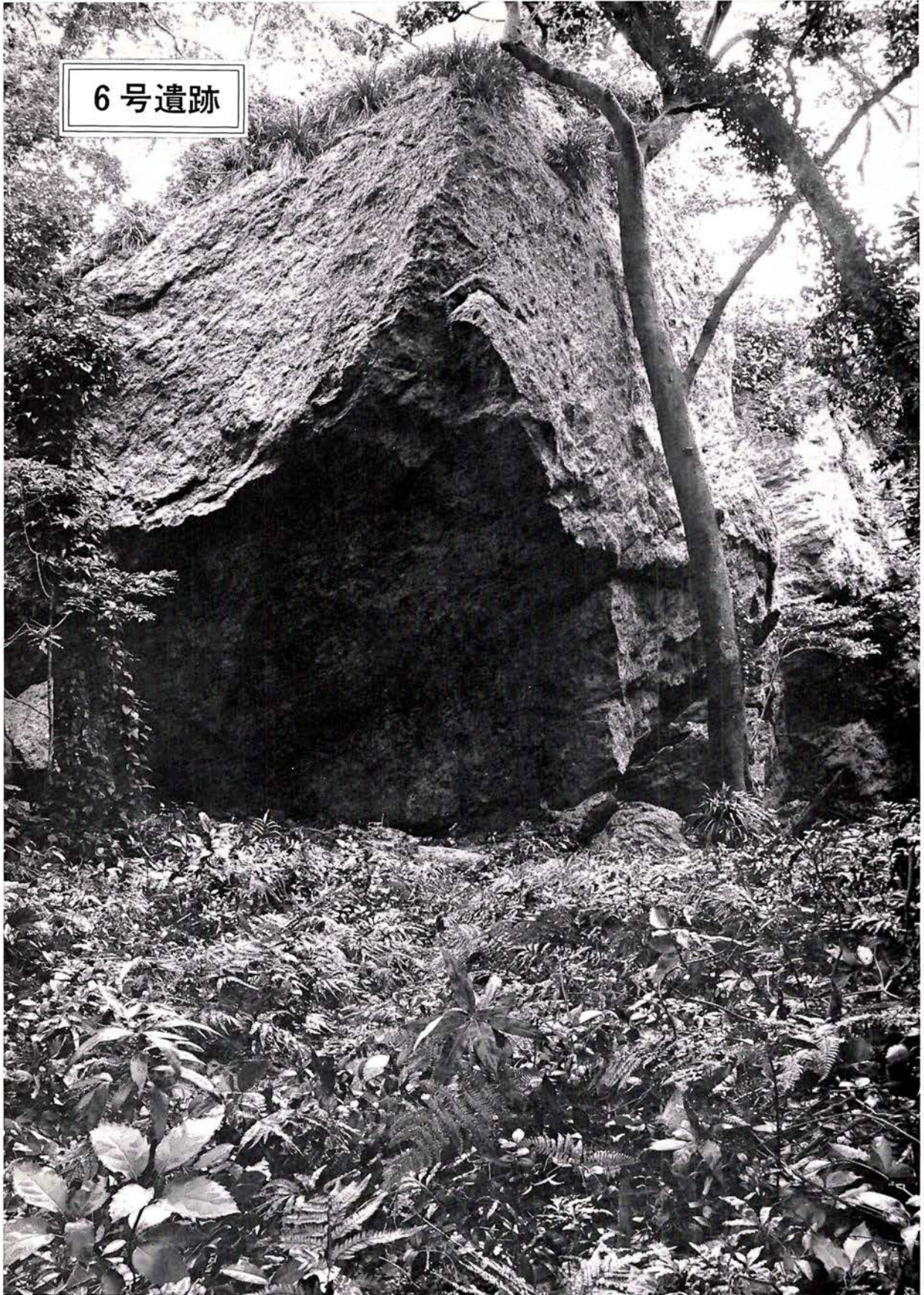
壙内にはこのほかに鉄刀子、鉄片、土師器小形丸底埴二個体分があった。

土壌は島の上方に露出している石英玢岩の割石を三枚寄せて蓋石とし、壙の周辺はさらに割石を集積していた。土壌の中央は蓋石がなく、すでに崩落したと思われ、当初はおそらく4～5枚の蓋石をかぶせていたものであろう。

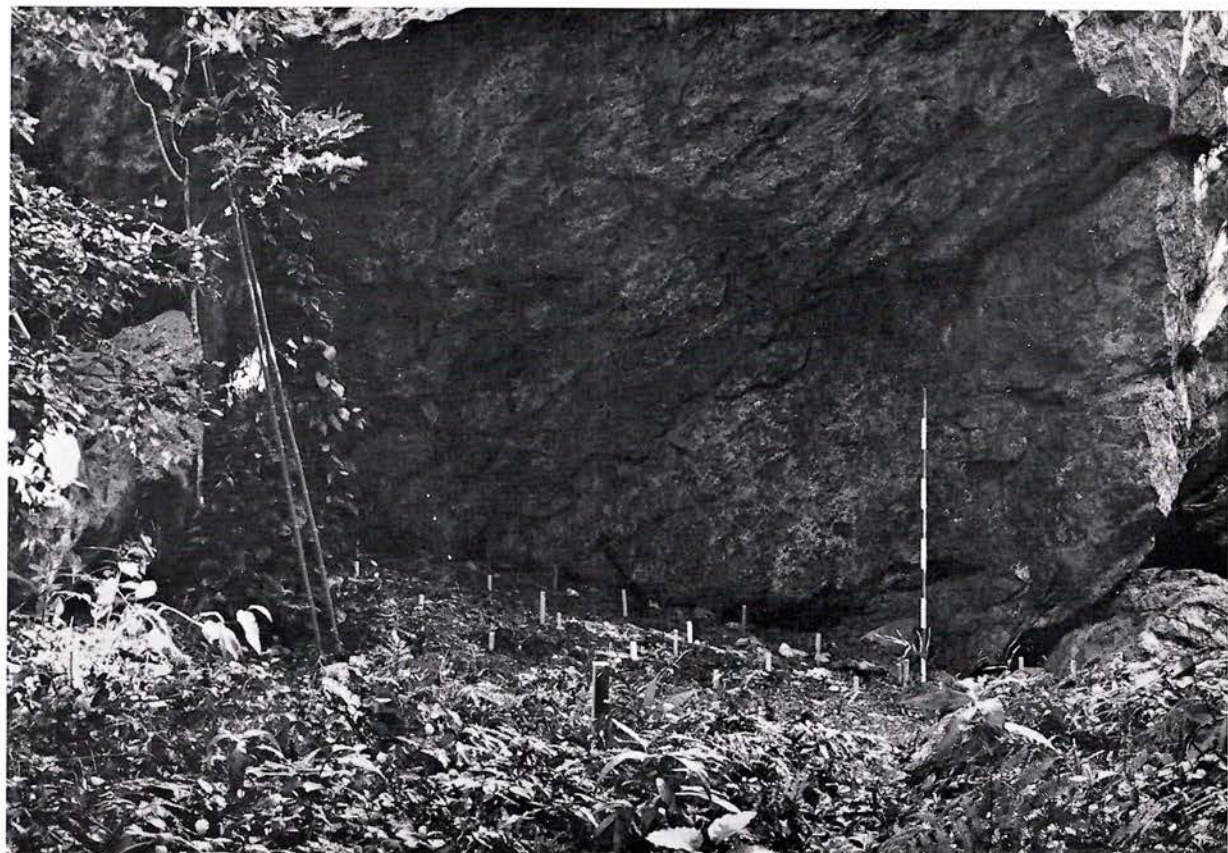
また土壌のすぐそばの崖面には土師器小形丸底埴1個が、ややずれ落ちた状態で発見された。おそらく土壌の蓋石上に据え置かれたものであつたろう。蓋石の間には小さな礫石1個が詰められていた。

これまで鉄素材としての鉄鋌は16号遺跡から2例（一つは長さ43cm、一つは31cmでいずれも完存長ではない）の発見があり、九州本土では福岡県糸島郡御床松原遺跡に類品の報告があるが、極めて珍しい。畿内及び南鮮の古墳にはかなりの出土例が報告されており一般に4～5世紀代に大和政権の半島進出にともなう半島南部から鉄の素材としてもたらされたものと云われているが、そうであるならば沖ノ島の海上交通上の位置と、その信仰を考える上で極めて意義深いものと言えるであろう。土師器の形態的特徴が示すところではこの遺跡を5世紀中葉頃に比定することができるが、沖ノ島の祭祀遺跡の多くが沖津宮周辺の巨岩に奉献されているので、この遺跡が異っていることが注意されるのである。

6号遺跡



C巨岩下の6号遺跡(調査前)



測定の杭をうつ



表土を除いたところ



銅鏡、鉄釣針、刀子の出土状況



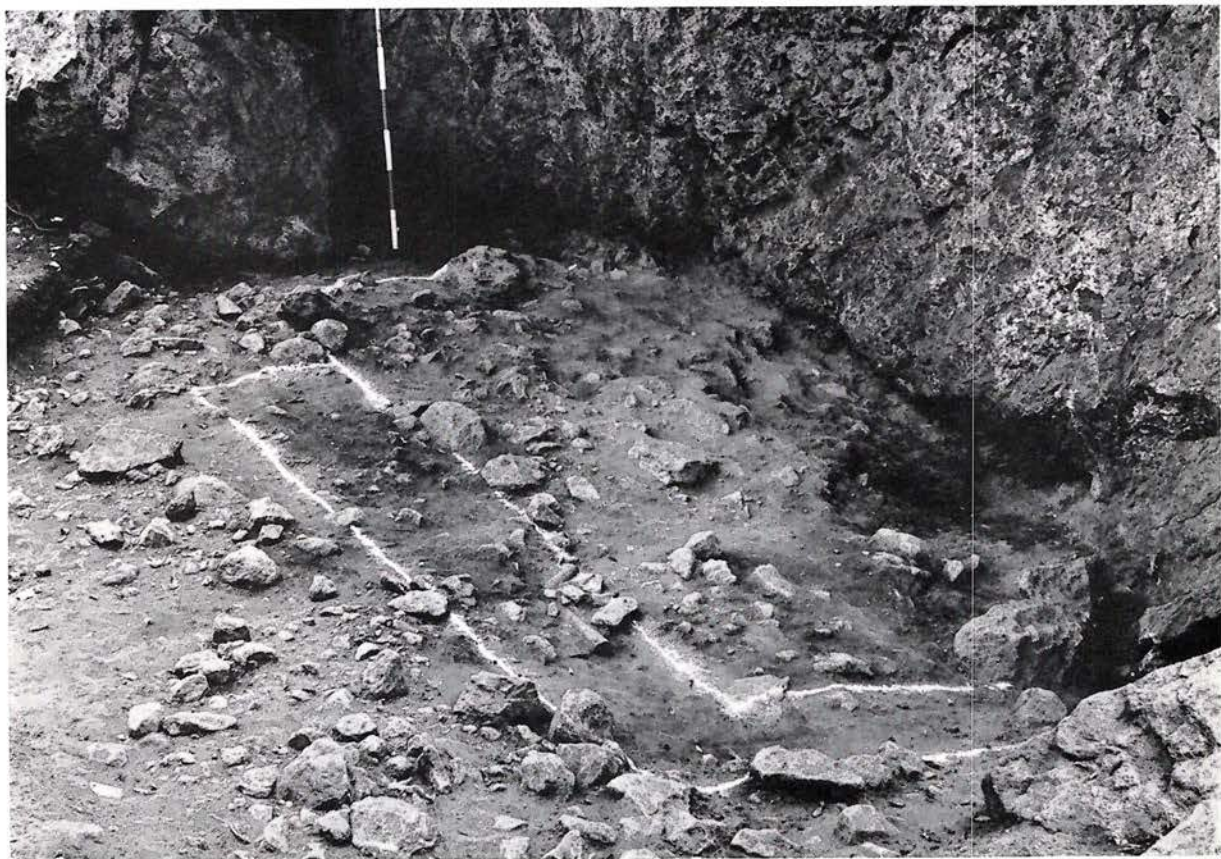
歩搖付雲珠の出土状況



金銅製長頸壺、銅小鏡、鉄刀、滑石玉、土器等の出土状況



祭壇状の遺構



同上



◀ 中央岩上の割目にはりついていた楕形石

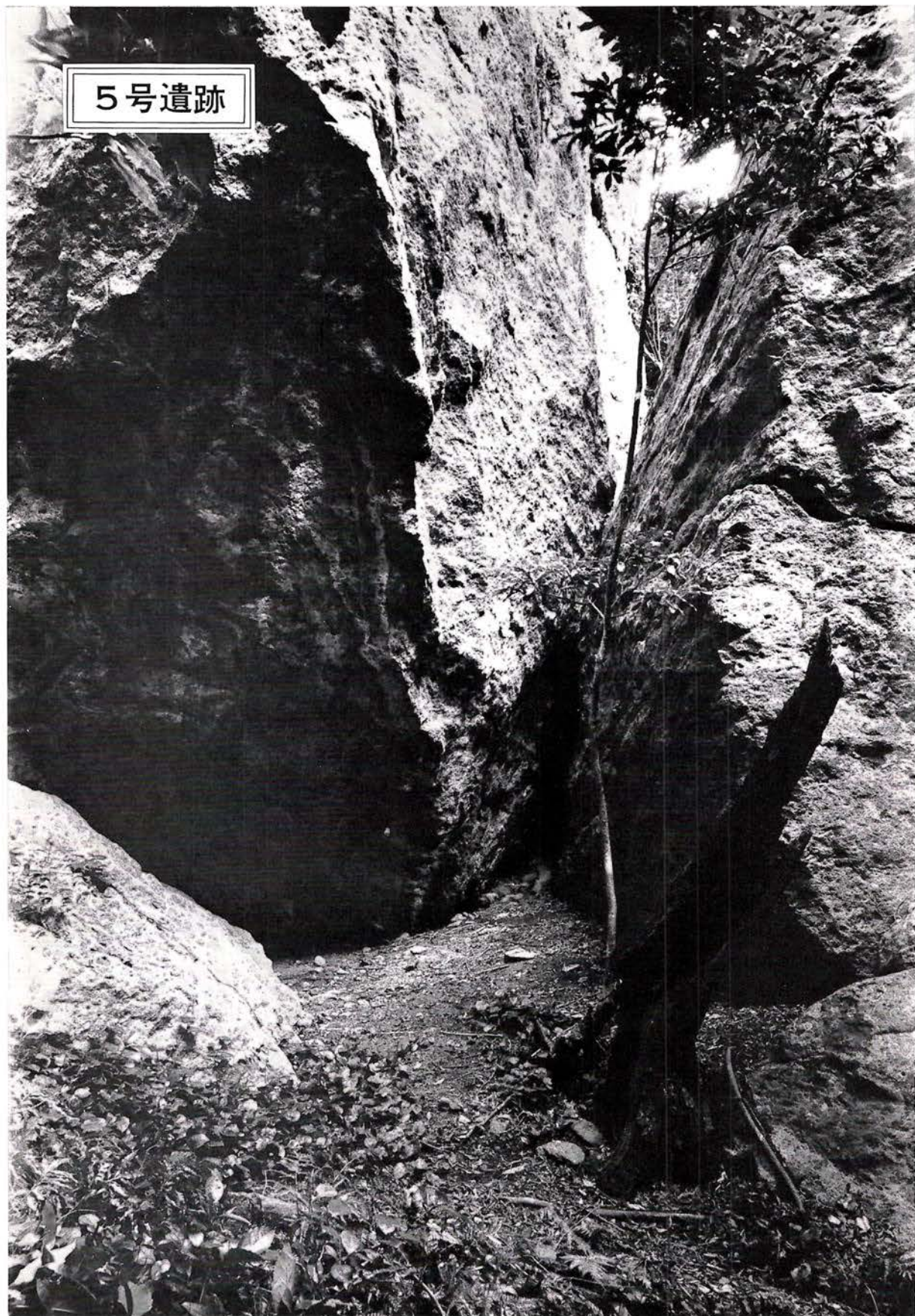


6号遺跡(左)と5号遺跡(右)との関係 (発掘終了後、両遺跡の高低差約1.5m)



5、6号を通ずる間隙 ▶
下方は金銅製長頸壺・盃

5号遺跡



B巨岩(右)とC巨岩(左)にかこまれた5号遺跡 (調査前)



表土を除いたところ(左下に唐三彩片あり)



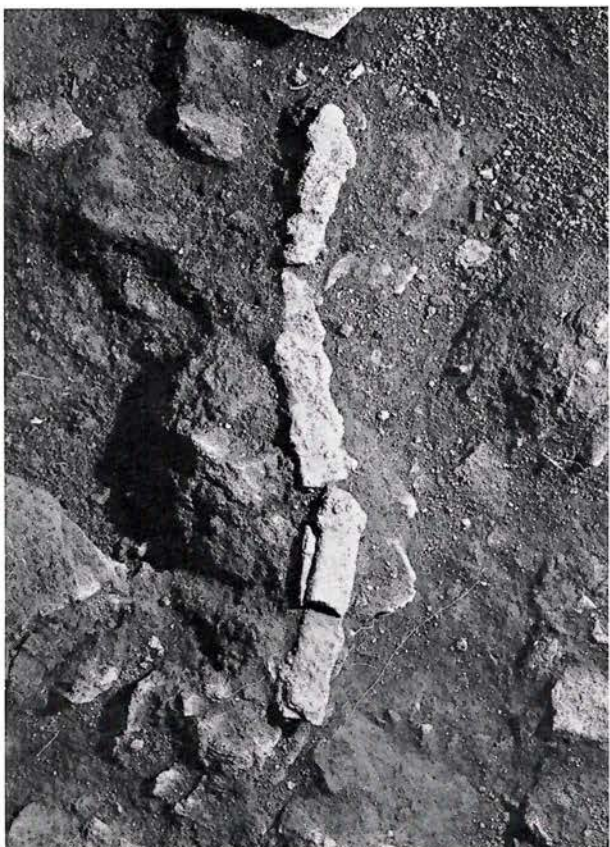
須恵器の出土状況



金銅製金具、鉄製品の出土状況



金銅製金具の出土状況



鉄刀の出土状況



金銅製金具の出土状況

正三位社前遺跡



山側より見た正三位社



空からみた正三位社（矢印が遺跡）



鉄鋌、土師器の出土状況

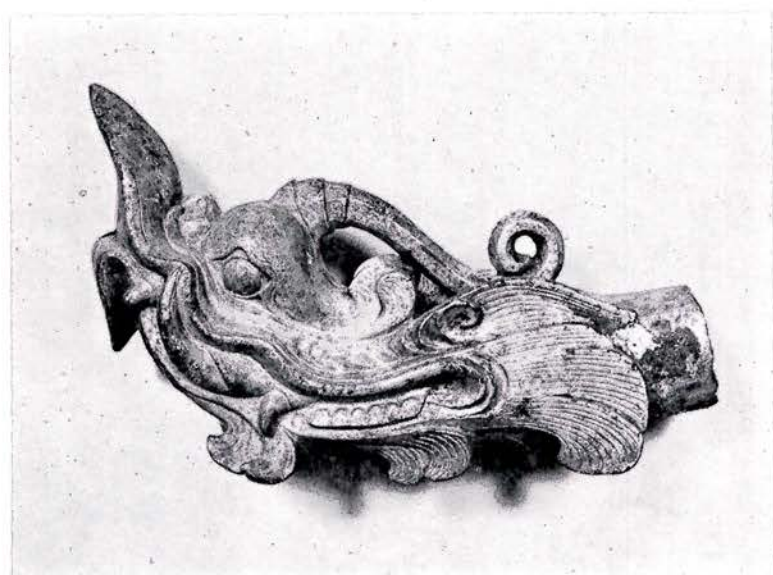


鉄鋌、土師器の発見された土壌

VI 主要遺物とその解説

5号・6号遺跡、正三位社前遺跡の項で述べたように、出土の遺物の種類は多岐多様にわたっている。いまこれらの遺物の中で主要なものを選び、その性質について解説をこころみたい。

金銅製龍頭については杉村勇造氏、唐三彩については小山富士夫氏が精細な解説を寄せられたが、その他の遺物については逐次研究を進め後の機会に解説できると思う。



金銅製龍頭 一対

1 金銅製龍頭

杉村 勇造

昭和44年4月予備調査のため渡島した松見守道氏は試作した電波金属探知機を携行したが、4月4日5号遺跡の岩蔭で試験中に本品を発見した。

この一対の金銅製龍頭は内部が空洞の筒形となり、長さはA型20.0cm、B型19.5cm、径はA型4.7cm、B型5.2cm、高さはA型10.2cm、B型11.3cmで装飾文様も多少異なり、二つの型から鑄成されたものである。前部の口は開き、上唇は鳥の嘴のごとく尖って長く伸びて上方に曲り、下唇は舌状に下方に垂れ屈折している。口の内側中心に鉄の丸棒を挿入した孔(径1.0cm)があり、Bには鉄の断片が詰っている。

また後部の円筒形部分に後端からAは1.3cm Bは1.0cmの横面に鉄錆のついた孔(径0.3cm)があり、木棒の留金とした鉄釘の痕であることがわかる。円筒形部分の径は3.1cmで木棒差し込みの深さは14.5cmである。

龍の牙は大きく口元より上方に屈曲し、その前後に小牙各一本があり、後方に歯形が連っている。口部の後方や下部は羽状の彫りを施し、腹部はいわゆる蛇腹で13組の皺を刻している。(43頁写真および表紙原色版参照)

この金銅製(筒形)龍頭の時代及び用途について些さか考察を試みたいと思う。

(1)龍の様式：龍の様式は時代によって変化する。殷・周時代はさて置いて、漢時代になると龍は石刻・瓦磚等の遺物に見ることができ、その頭部の口は鰐の前唇のごとく先端は上下唇ともにやや凸起しているものが多い。魏・晋時代には参考とすべき龍頭の遺品はないが、東晋の顧愷之等の画人は道教の興隆によって龍画を描いたという記載がある。

北魏時代の山西省大同の雲岡石窟には佛龕・石柱または天井などに龍を彫刻したものが多数残存しているが、これらの龍形は上唇は長く上方に屈曲しているが、下唇は短かくて屈曲しているものはない。角は一角のものが多く、耳が長く突出しているのが特長である。これらの雲岡石窟の遺物は西紀460年から500年頃に製作されたものであるから、これらの龍頭はその時代の一様式と考えられる。

しかるに山西省太原に近い天龍山石窟群の中で、東魏時代(534~550)の石窟と考えられている第2窟の東壁・西壁にある佛龕の両側に垂れ下がる龍頭は、いずれも上唇は長く鳥嘴状をなし、下唇も鳥嘴状で下方に屈曲し、口辺の眼窩や後方の羽状の彫、一角などは今回出土の金銅製龍頭にきわめて類似している。

これにつぐ遺品としては東京国立博物館所蔵の法隆寺献納御物中に、六朝時代の遺品と伝承されてきたしゅうと鏹斗があり、この鏹斗の柄は龍頭となり、その口唇は鳥嘴形をしている。また7世紀の製作といわれている龍頭水瓶もあり、その上唇は上に捲いて屈曲し、下唇は短い。一角で眼窩の上線は富士山形に三折している。

以上の諸遺物を比較してみると、今回出土の金銅製龍頭は6世紀中頃の様式であると想



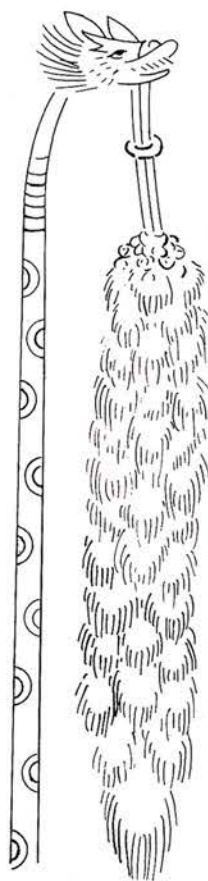
山西省太原天龍山石窟（東魏時代）の佛龕にある龍の浮彫断片



法隆寺の金銅製水瓶の龍首



甘肅省敦煌石窟第159窟吐蕃王出行図（8世紀末・9世紀初）



旌旗の竿につけた龍頭
（「新定三禮旌旗図」巻第9—北宋時代一）

定されるのである。

(2)金銅製龍頭の用途：中国では旗幟類の竿頭に金銅製龍頭を用いることが古代から行なわれ、『大唐六典』巻17の項には「旂首金龍頭、御錦結綬、及綉帶垂鈴」の記事があり、『大明會典』巻182には「凡麾・幢・旛・節等、挑竿銅龍頭、俱以鉄為鈎」の記事がある。〔前者は唐の開元年間(713～741)、後者は明の弘治年間(1488～1505)に編纂された。〕これらの記事によって金銅製龍頭は旗類の竿頭を飾るものであり、龍頭の口部の鉄片は鉄鈎の残痕であることが了解される。

これを仮に旗首類の飾りとして考え、中国側の文献を見ると、耶馬台国の記事の出所である『魏志』倭人伝には、景初6年(245)に倭の難升米に黄幢を賜わる記事があり、『宋書』倭国伝の元嘉28年(451)や『南齊書』倭国伝の建元元年(479)等には「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍」というように、わが天皇に対しおそらく一方的に日本・韓国の都督大將軍に任じているので、あるいは旗幟の一種である「節」を贈ったかも知れないが、この時代の龍は様式が相違しているし、また節が一對であるとは考えられない。

ところが、東魏(534～550)の滅亡後わずか12年後である欽明天皇の23年(562)の『日本書紀』巻19の項には

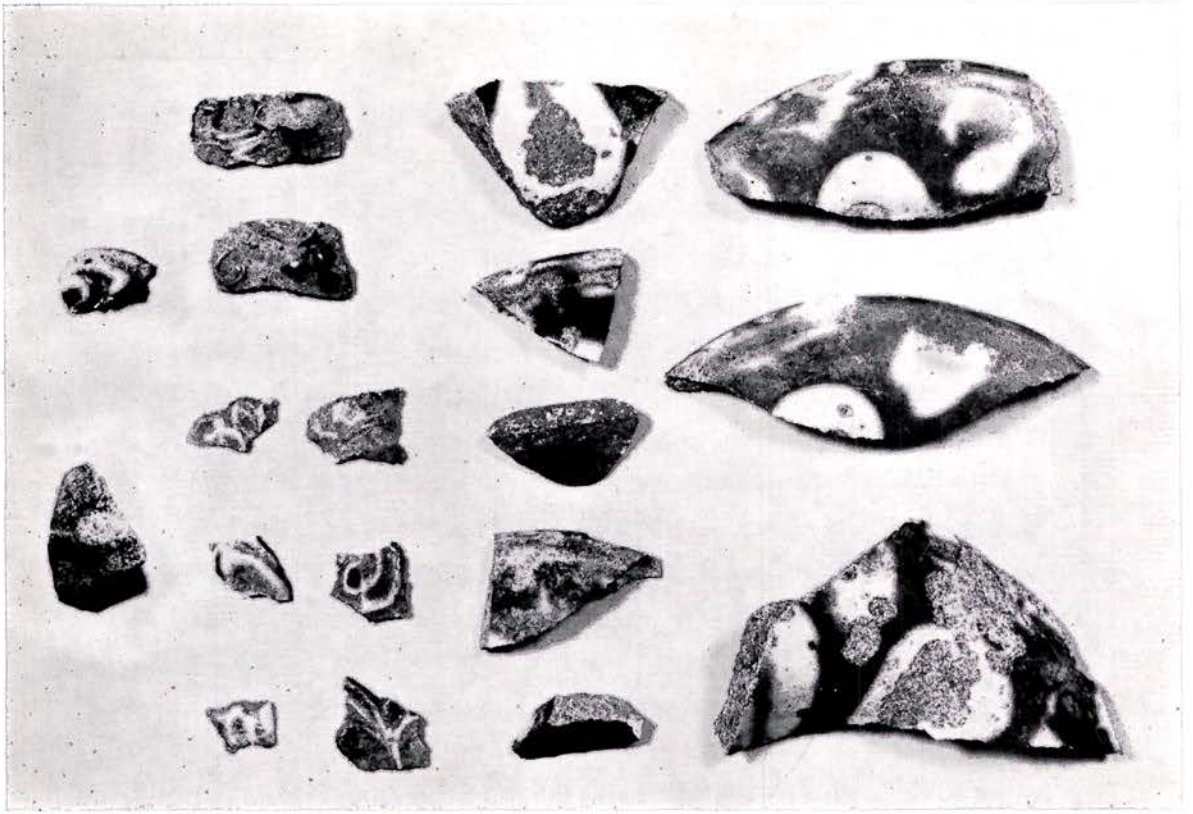
「八月、天皇遣大將軍大伴連狹手彦、領兵数万、伐于高麗、狹手彦乃用百濟計、打破高麗、其王踰墻而逃、狹手彦遂乘勝以入宮、盡得珍寶・貶賂・七織帳・鉄屋、還來、以七織帳、奉獻於天皇、以甲二領・金飾刀二口・銅鏤鐘三口・五色幡二竿、美女媛并從女吾田子、送於蘇我稻目宿禰大臣、於是、大臣納二女以為妻、居輕曲殿」

(八月、天皇大將軍大伴連狹手彦を遣し、兵数万を領せしめ、高麗を伐たしむ、狹手彦乃ち百濟の計を用ひ、高麗を打破す、其の王墻を踰へ逃ぐ、狹手彦遂に勝に乗じ以て宮に入り、盡く珍寶・貶賂・七織の帳・鉄屋を得て還り來る、七織の帳を以て、天皇に奉獻し、甲二領・金飾刀二口・銅鏤鐘三口・五色幡二竿と美女の媛并に從女吾田子を以て蘇我の稻目の宿禰大臣に送る、是に於て大臣二女を納れて妻と為し、輕の曲り殿に居らしむ。)

の記事があつて、五色の幡二竿が高句麗の王宮から戦利品としてわが国に伝えられたことが明記されていることは注目に値する。

東魏は黄河の北方にある鄴(今の河南省臨漳県西約30軒)を都とし、当時高句麗は年毎に東魏に朝貢していることが『北史』に記載されているので、或はこの五色の幡二竿も東魏から賜わり高句麗の王宮に宝蔵されていたことも想像されるのである。

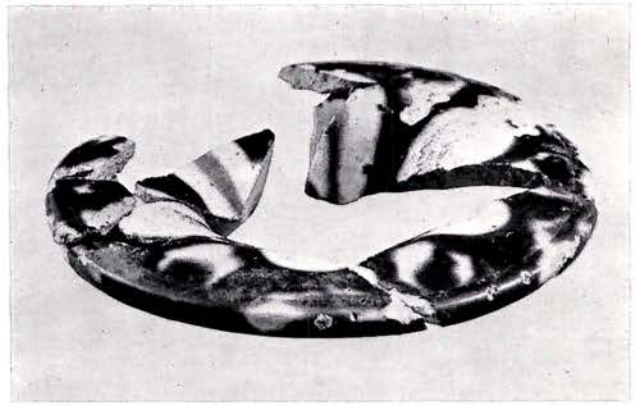
沖ノ島出土の金銅製龍頭が一對であり、龍の様式が東魏時代と合致するので、この五色の幡二竿が宗像大神に奉獻されたという仮説も、当時の半島との軍事関係を考えるときに成立つのではあるまいか。



5号遺跡出土の唐三彩破片



唐三彩花瓶（東京国立博物館蔵）



(上)沖ノ島出土品(7号・5号遺跡出土品)

(下)左図唐三彩の口縁部

2 唐三彩

小山 富士夫

玄海の孤島の沖ノ島からはいろいろと珍しいものが発見されているが、唐三彩が18片発見されたということは世界を驚かすに足るビッグ・ニュースである。

昭和29年沖ノ島の最初の学術調査が行なわれた時、7号遺跡の岩蔭から三彩が4片発見された。私が初めて実物を見たのは30年だったか31年だったかはっきりとは記憶しない。唐三彩のようだが、奈良三彩かも知れないし、どちらとも断定ができなかった。当時唐三彩が洛陽・西安以外の土地から出土した例を知らなかったし、また奈良三彩もあまり見ておらず、その区別は漠然としていた。

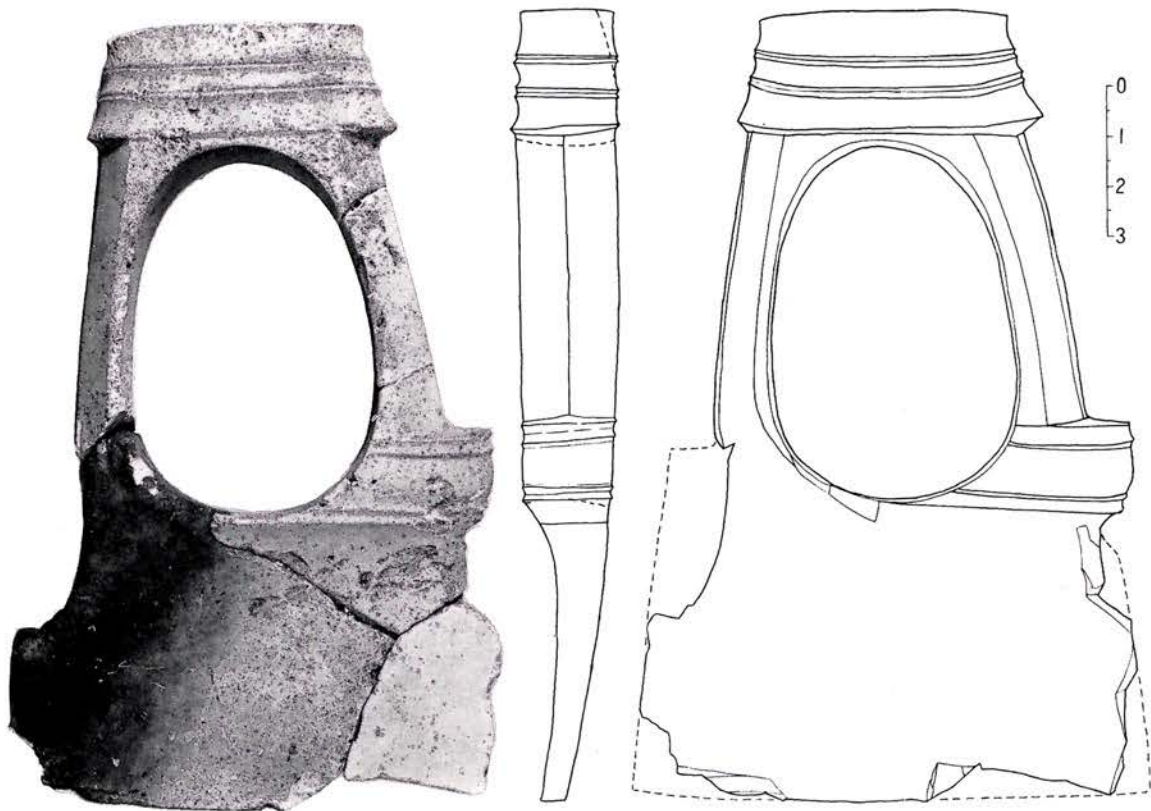
唐三彩は唐でも盛唐時代だけにつくられたものらしく、唐の古い都、あるいは西の都の陝西省長安(今の西安)と、後の都もしくは東の都の河南省洛陽から主として発見され、それ以外の遺跡で発見された例は極めて少なかった。

昭和37年私はヨーロッパ各地を歴訪したが、イタリア北部のファエンツアに行った時、国際陶磁博物館に陳列してあるスウェーデンの考古学者のマルティン博士がカイロの南郊のフォスタットで採集した陶片約3,000片の中に、唐三彩が2片あるのを見て驚いた。また昭和42年2月、当時の平城宮跡調査部長の杉山信三博士が奈良大安寺の一角から唐三彩の破片を120余片発見された。大安寺出土の唐三彩はいずれも俗に書枕とよばれている長方形の小箱の残片で、どれも火災にあって釉面が焼けただれている。その中には練上げの素地の上に藍彩のかかったものなど、かつて見たことのない唐三彩がいくつかあり、戦後の大きな発見の一つとされている。

戦前知られていた奈良三彩は正倉院南倉にある三彩五点の他、大阪府茨木市安威大織冠山で発見された骨壺(重文・東博蔵)、天津市南滋賀廢寺址、崇福寺址出土の盤・陶片ぐらゐのものだった。しかし戦後は三重県鳥羽市神島、奈良の平城宮跡、興福寺一乗院址、大安寺址、法隆寺金堂基壇の他、わが国各地からかなりの数の奈良三彩が発見されている。

これらの資料を見て私は数年前から沖ノ島出土の三彩は唐三彩ではないかと思うようになった。

昨年10月私は三笠宮殿下にお伴して沖ノ島を見学に行き、新たに発見された10余片の陶片を見て唐三彩に間違いないと確信をもつようになった。特にメタリオンの細片が9片発見されたことはたしかに唐三彩であることを立証するものである。現在発見されているのは花瓶の首部の残片と推定されるもの7片と胴に貼付けたメタリオンの剝落した細片が9片と底部ではないかと思われる破片が2片だが、残余の陶片は一体どこにいったのだろうか、将来発見されることを熱望してやまない。



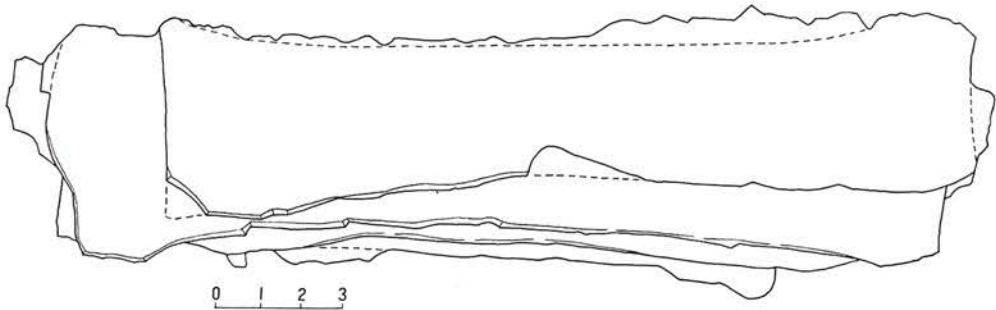
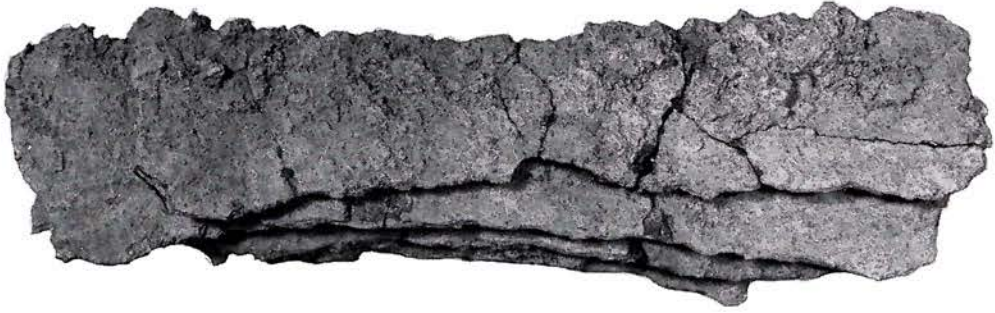
鍬形石 h. 16.0cm

3 鍬形石

5号と6号遺跡の境をなす基岩上の凹み穴に破片として無雑作につめこんだ状態で発見され、一部は露出していた。5個の破片を接合すると鍬先部の周囲が若干不足しているがほぼ完形（全長約16cm）になった。緑色碧玉岩製で破損面も風化しているのでこのような納置状態が最近のしわざとも思われない。先端の小破片は5号遺跡に流入していた。

形態は通有のもので頭部と腹部に節がある。頭部に二條の細い平行線をめぐらし、背面には縦方向の溝をつくっている。中央の穴は縦方向7cmの卵形に細長く穿たれて、厚み2cmをはかる。腹部の節につづく鍬先部は先端でひろがって復原幅10.5cm、厚みは6mmと薄くなっており、側面観は片方に反っている。

石製腕飾りのなかでも鍬形石の発見は九州では大分県北海部郡佐賀関町猫塚古墳で文久3年に2個発掘された記録が残っているが、北九州では初めての発見である。沖ノ島の祭祀が4世紀後半頃すでに畿内との交流のもとに始められていたことを物語る貴重な資料である。



鉄鋌 1. 19.0～22.3cm

4 てっぺい 鉄鋌

沖ノ島では、かつて16号遺跡から鉄板2枚が発見された。1枚は現存長43cm、幅9.2cm、厚さ0.7cm、他の1枚は現存長31cm、幅8.6cm、厚さ0.6cmをはかり、鉄鋌と想定された。鉄鋌とは鉄の地金で、これを素材として各種の鉄器を製作するのである。

今回の調査では正三位社前から径70cm、深さ30cmの円形土壌中に土師器2個とともに鉄鋌9枚が発見された。その内8枚はくくり合わせた状態で出土し、他の1枚ははなれて出土したが、8枚の分は崖面に露出していたので、あるいはこのほかに落下したのもあったと考えられる。鉄鋌は最も長いもので長さ22.3cm、端の幅5.7cm、中央の狭くなったところで4.0cm、短いもので長さ19.0cm、端の幅5.8cm、中央の狭くなったところで4.1cm、長方形の撥形であるが中央の部分が狭くなっている。

この鉄鋌は九州の古墳からはこれまで発見された例がないが、昭和20年奈良市法華寺町のウワナベ古墳の陪塚である高塚古墳（大和第6号墳）から872枚の鉄鋌が発見されて注意

をひいたことがある。この内、大形品は30 cmより40 cm位、小形品は16cm位である。これでは沖ノ島16号遺跡出土のものは大形品、正三位社前遺跡出土のものは小形品とすることができる。

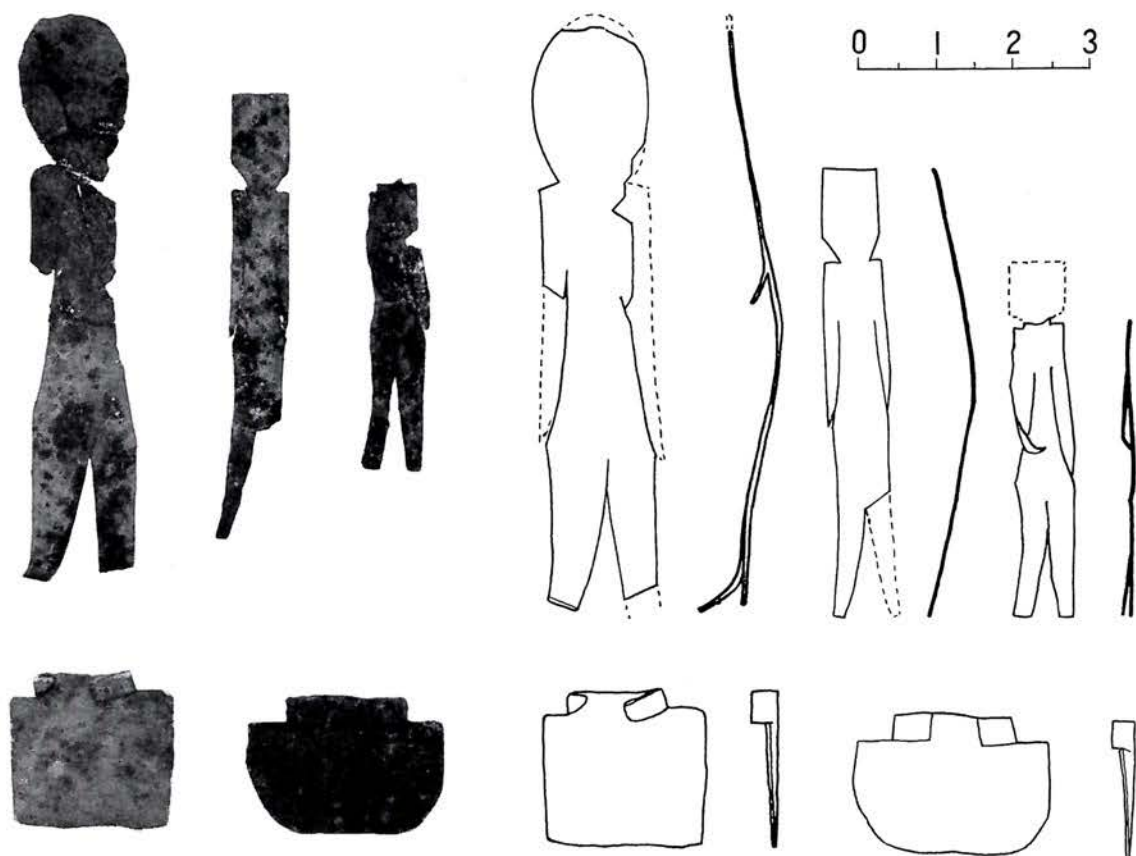
朝鮮半島の南部、慶尚北道・南道の古墳からこの種の鉄鋌が発見されており、新羅の古都、慶州市の金冠塚からは数百枚出土しており、大邱・昌寧の古墳にもあり、昭和44年釜山市東萊の古墳より約百枚発見された。

16号遺跡、正三位社前遺跡は5世紀代にあてられ、日韓の交渉が最も盛んな時期で、日本では鉄生産がはじめられていたとしても、いまだ大陸に鉄の素材をもとめることが少なくなかったであろう。『日本書紀』の神功皇后46年の條によると百済の肖古王が日本からの使、爾波移に「五色の綵絹各一匹及び角の弓箭並びに鉄鋌四十枚」をおくったことが記されている。

沖ノ島発見のものが、大陸よりもたらされたものであるかどうか、現在分析などで明らかにする方法はないが、こうした周囲の事情から考えて一度日本にもたらされたものを改めて奉献したと解すべき可能性は多い。

人形等の出土状況（5号遺跡）





(上)金銅製人形 h. 7.8cm、5.9cm、現長4.7cm

(下)金銅製小形鏃頭 h. 2.0cm、h. 1.8cm

5 かたしろ 形代類

これまで、滑石製の人形・馬形・舟形を総称して「形代」とよんでいる。ミニチュアとして神に捧げるものであるが、鉄刀・刀子・斧などの雛形も広い意味ではこれに入るであろうし、今回は滑石製の小形剣・斧形品も出土している。滑石製の形代類は前回多量に採集されており、将来また詳細に述べることもあると思う。

今回、金銅製人形3体が5号遺跡から出土したのは興味がある。その一は長さ7.8cm、幅1.4cm、厚さ0.1cmで頭部が卵形、その二は長さ5.9cm、幅0.8cm、厚さ0.1cmで頭部は長方形である。その三は頭部を欠くが現存長4.7cm、幅0.8cm、厚さ0.1cmをはかる。いずれも薄い銅板を切って首・両手・両足をあらわし、鍍金したものである。奈良市平城宮跡よりこれと同一形式の木製品が発見されている。『肥前国風土記』佐嘉郡の條に、荒ぶる神に山田の土をとって人形・馬形をつくってさし上げたという記載がある。土・滑石・金銅の材料の違いはあるにせよ神々の鎮魂、人々の安全を祈る祭りの場に捧げられたことが想像されるのである。



人面のある須恵器器台と印文土師器（5号遺跡出土）

5号・6号遺跡の土師器・須恵器



5号
h. 41cm



5号
h. 40cm



6号
h. 29cm

5号・6号・正三位社前遺跡の土師器・須恵器



正三位社前
h. 9 cm



5号
h. 7 cm



5号
h. 5cm



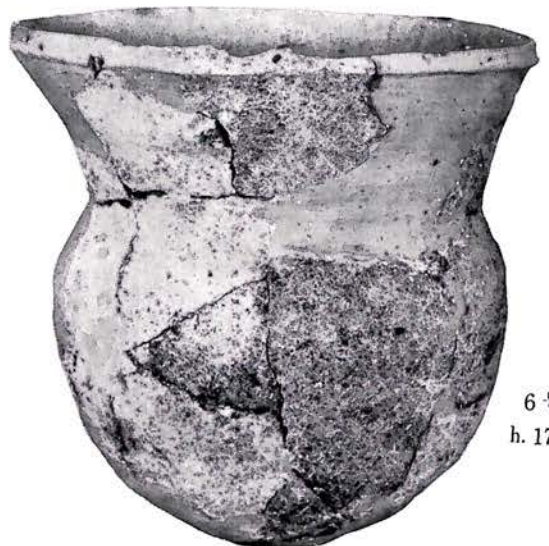
5号
h. 16cm



5号
h. 16cm



5号
h. 13cm



6号
h. 17cm

5号・6号遺跡の須恵器器台



5号
h. 22cm



6号
h. 27cm



5号
h. 37cm



5号
h. 33cm

5号.6号遺跡の須恵器長頸壺



5号
h. 17cm



6号
h. 17cm



5号
h. 16cm



5号
h. 17cm



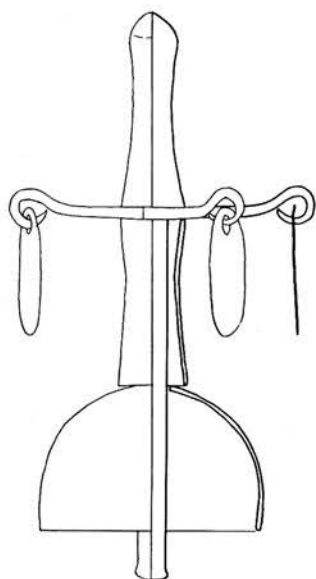
須恵器出土状況（5号遺跡）

6 土師器・須恵器 — 奉献土器 —

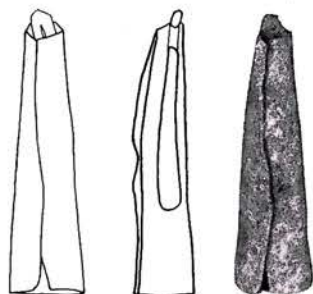
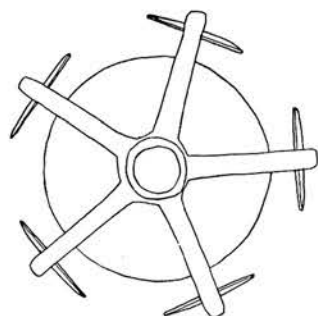
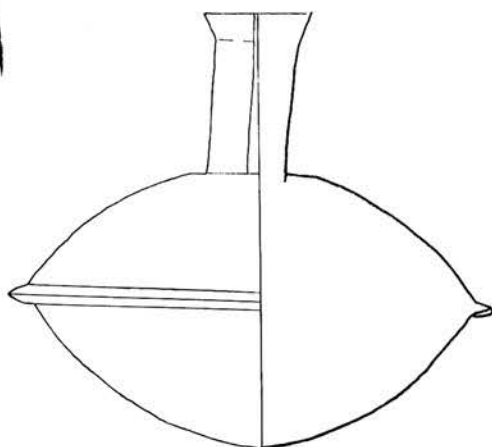
これまで土器類は1・3・4号遺跡では報告されているが、岩蔭遺跡では見る事ができなかった。今回調査で5号遺跡の東南部に一括まとまって発見された。これらはセットをなしているばかりでなく、奉献当時の様子をそのまま示していることは注目されることであった。

土師器は格子目、たたきの印文の丸底壺が3個出土している。須恵器は長頸壺が6個分高坏は2個、大甕は5個体ある。器台は4個、大小2種類で、須恵器第II様式にみる大形器台とは違った特色をもつ。その一つには人形の顔面が刻画されていた。小形の器台には土師器の丸底壺がのっている状況で発見されたが、大形の器台には大甕がのっていたことが想定される。印文の土師器も今後問題になるものであり、須恵器も6世紀後半より7世紀にかかると考えることができる。

6号遺跡の銅製品



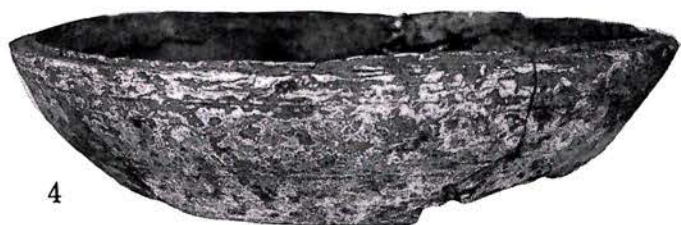
1



2



3

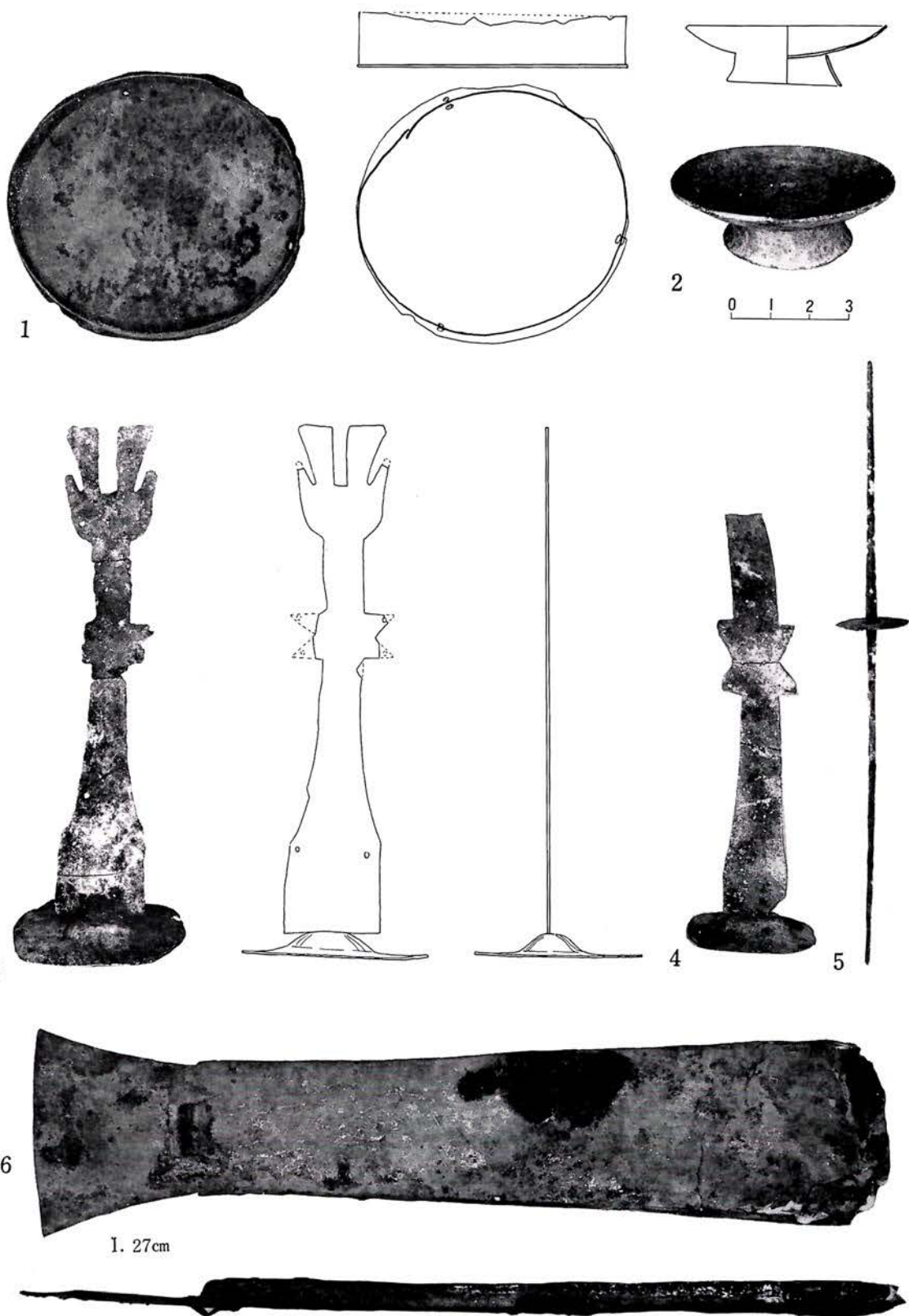


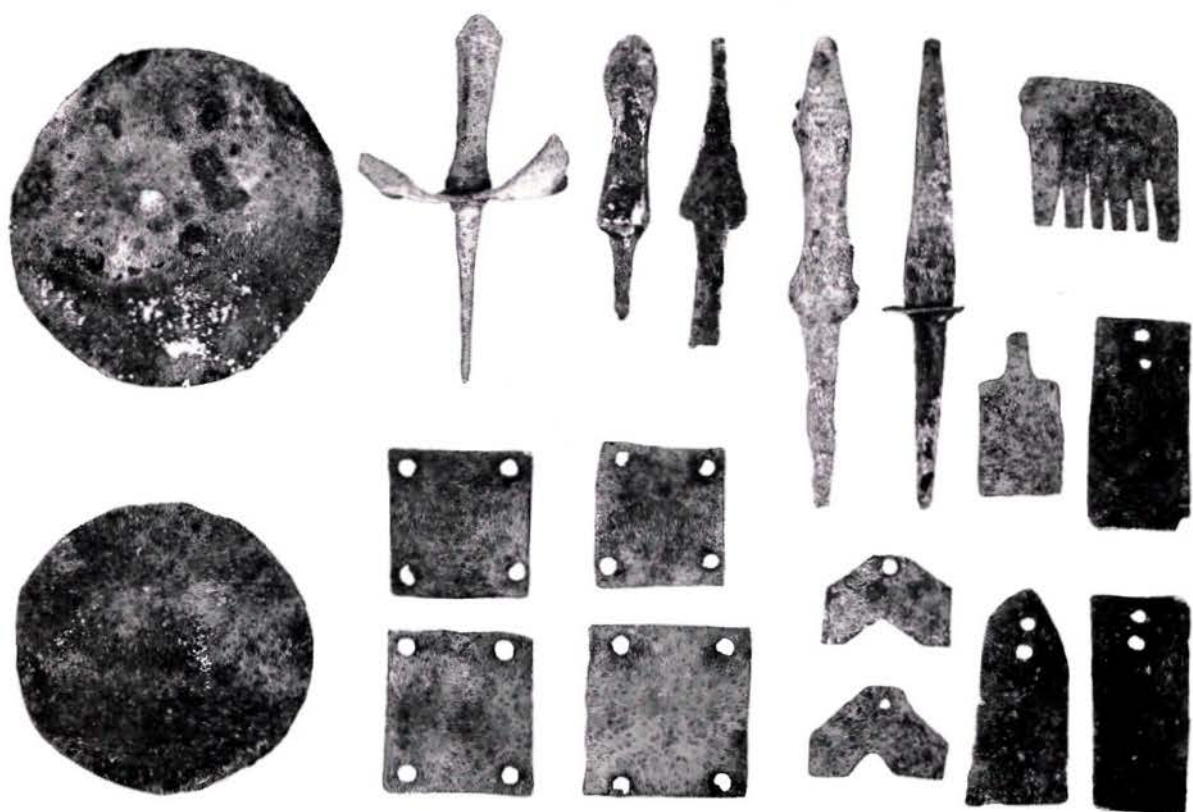
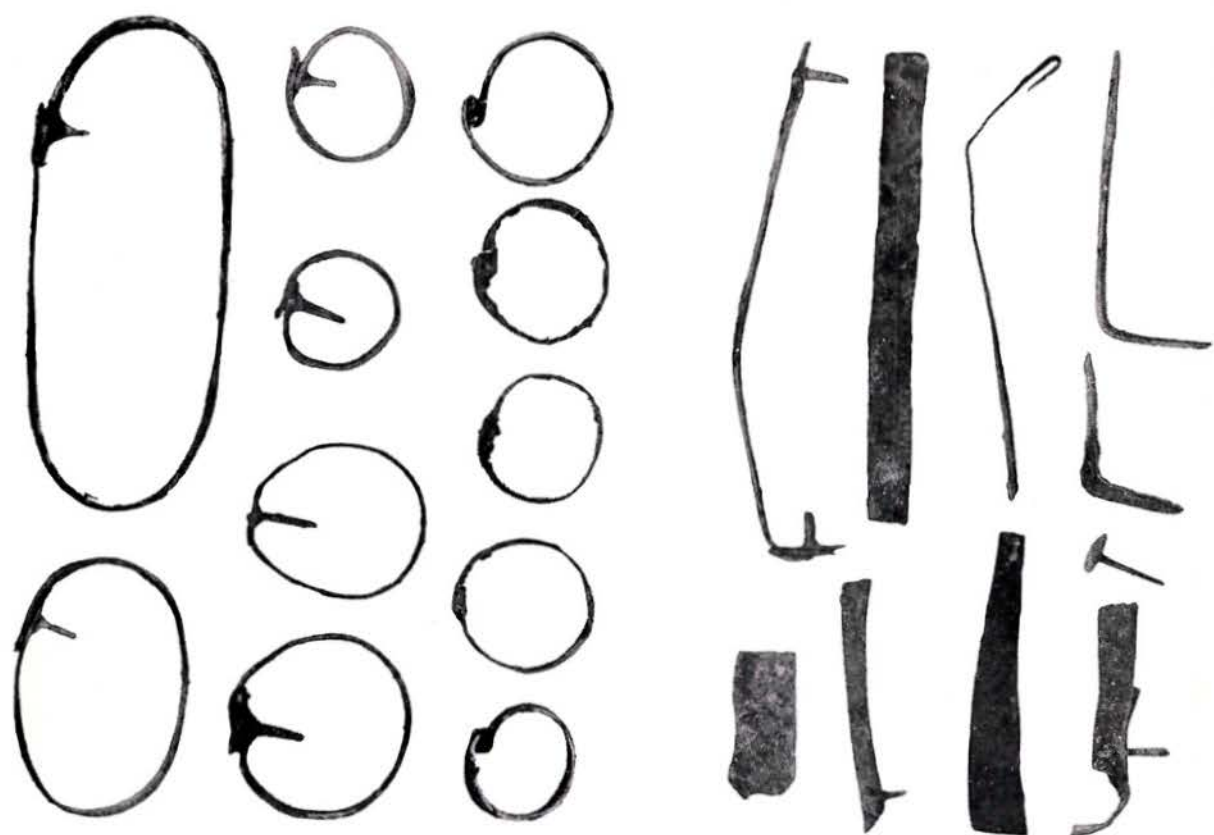
4

1. 金銅製歩搖付雲珠
2. 小形銅鐸状銅製品 (舌あり)
3. 金銅製細頸壺
4. 銅碗

5号遺跡の銅製品

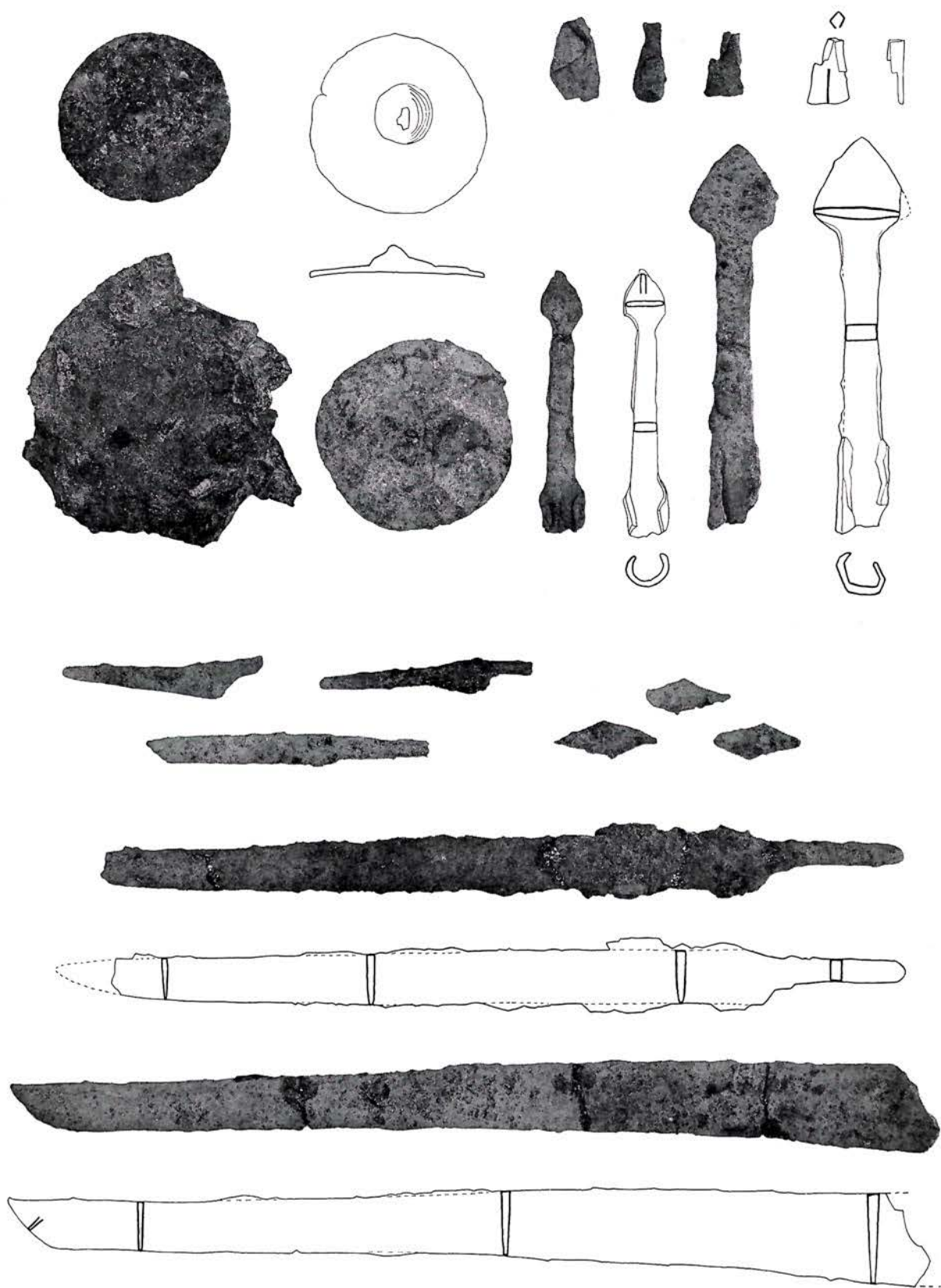
1. 金銅製盒 2. 金銅製小盃 3・4. 金銅製飾金具 5. 銅製小形細具 6. 金銅製飾金具





5号・6号遺跡の鉄製品

(鏡・形代類—斧、矛、刀子、刀)



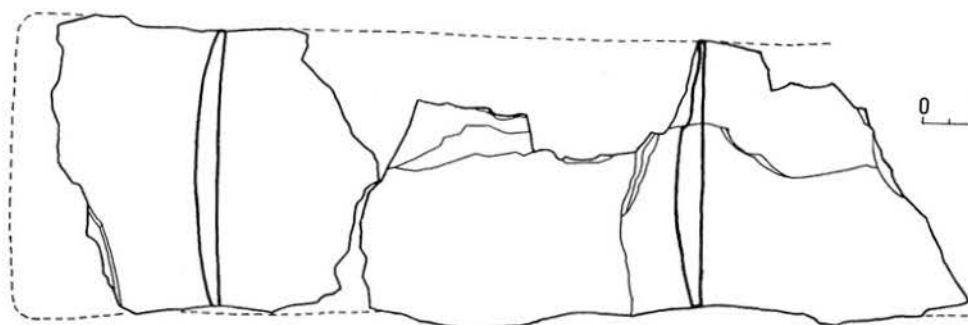
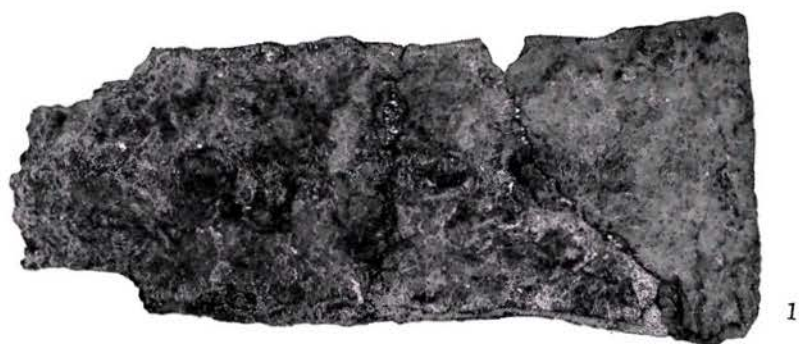
5号・6号遺跡の鉄製品

1. 鉄斧

2・3. 石突

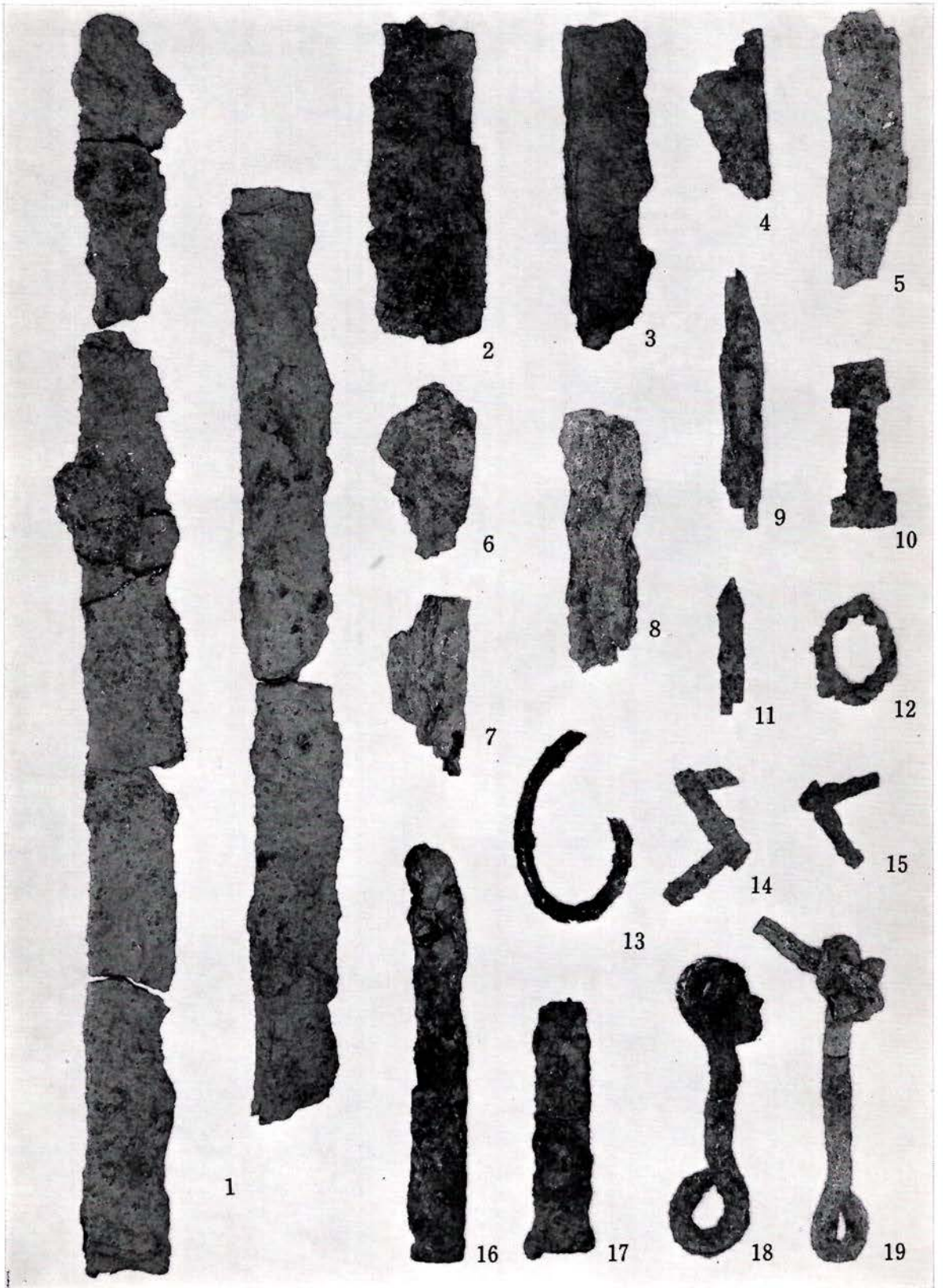
4. 矛

5・6・7・8. 鉄鋌



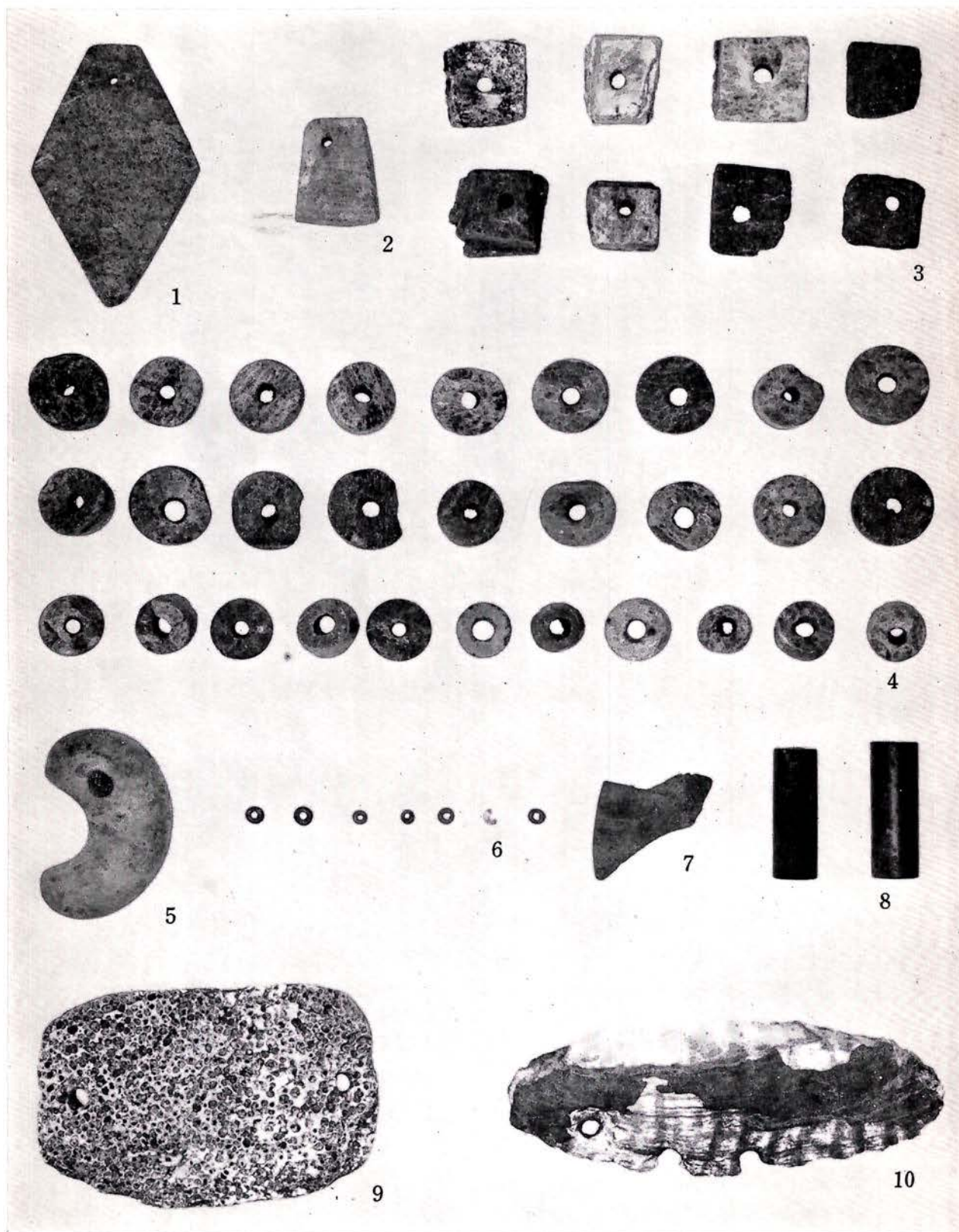
5号・6号遺跡の鉄製品

1~9. 直刀 11. はり 12. 環 13. つりばり 16. やりがんな 18・19. くつわ その他不明鉄器



5号・6号遺跡の滑石製品・装身具類

1. 剣形品 2. 斧形品 3. 平玉 4. 白玉 5. 硬玉製勾玉 6. ガラス小玉
7. 碧玉製車輪石片 8. 碧玉製管玉 9・10. 鮑貝製装身具



VII おわりに

玄界灘にうかぶ沖ノ島は、波濤をこえてくる人々には神島として映じた。前回の調査でこの島に縄文時代・弥生時代すでに人々が住んでいることが明らかにされた。古墳時代に入ってこの神島では沖津宮を中心とする巨岩群が祭祀の場としてえらばれ、神々がここに降りてこられるものと考えられたのである。はじめは18号遺跡のような巨岩上の遺跡からはじまり、8号・7号のような岩蔭遺跡がこれにつき、また北の比較的高所より、時代が下るにつれ、しだいに南方の低い場所に移ってくるものが想定された。このため昭和44年度は8号・7号遺跡の南にある6号・5号遺跡をえらび、次回はさらに4号遺跡より下って調査する計画をたてた。6号・5号はともに巨岩の岩蔭遺跡であり、6号では岩蔭に明らかに石組みの祭壇の遺構をみつめることができたのである。

6号遺跡では5世紀代のものと想定される半島南部の馬具などがあるが、出土の須恵器などからみて6～7世紀の間に奉献したものであろう。

5号遺跡では祭壇が明らかでなかった。遺物の中には6号からの流れこみもあることが考えられるが、須恵器などはもともとの状態で奉献したものである。須恵器には6号と同類の器台があり、その製作地や編年についてさらに今後追求する必要がある。5号遺跡の年代も6号とはあまり大差がないと考えられる。

この6号遺跡からは、後の杉村・小山両氏の解説にあるようにきわめて重要な遺物が出土した。一は金銅製龍頭であり、一は唐三彩である。金銅製龍頭はその様式よりみて、あきらかに中国製品で、東魏代(6世紀前半より中葉)を中心とする年代にあてられる。一対そろって発見されたのは、これが遊離せず一組みの機能が知られていたであろう。出土の状態からみて須恵器とほぼ同じ時代の奉献と考えてよい。

もう一つの唐三彩は、5号からは18片発見されたが、前回調査された7号遺跡の4片と接合するものであり、長頸の花瓶の口縁部と底部とになる。唐三彩は唐代の開元・天宝代(8世紀初頭)を中心とするものである。これが5号および7号に何故わかれて発見されたのか疑問がのこる。当然この花瓶の胴の部分はどこかに未だのこされているはずである。

われわれは岩蔭の祭祀遺跡に、はからずもこのような豪華な中国大陸より舶載された遺宝が奉献されたことを知り得たのである。

5号と6号の間の岩の凹み穴より鍬形石が発見された。これは畿内の前期古墳では石釧・車輪石などとともに発見されるもので、ここでは前回調査された18号遺跡の鏡・石釧・車

輪石などの遺物群とくみあわさる性質のものである。

正三位社の前の崖から土師器と鉄の素材と考えられる鉄鋌9枚が発見された。これは土壕中に埋納されたものと考えられる。かつて16号遺跡よりも大形のものが出土し、今回も6号・5号遺跡から発見されているが、当時鉄を大陸へもめた日本が、半島南部より輸入した公算がきわめて多く、古代の日韓交渉を示す重要な資料というべきであろう。

こうしてみると社務所前の縄文時代(前・晩期)、弥生時代(前・中・後期)の生活遺跡にひきつづき古墳時代前期、4世紀から5世紀にかけて半島との交渉の盛んになるころから祭祀遺跡があらわれ、その時期では畿内の重要な古墳にみるような鏡や石製品などが奉献される。鉄鋌もこの頃からあらわれる。岩蔭遺跡になると、半島南部よりもたらされた馬具・金製品が加わる。今回の岩蔭遺跡では金銅製龍頭・唐三彩のごとき豪華な中国製品を加えたのである。またこのころから須恵器の類も奉献され、奈良時代にひきつがれたものと考えられる。

数世紀にわたるこの島の祭祀は、その内容や「日本書紀」などの記事からみて、大和朝廷の大陸交渉の重要な時点における祭祀であったと考えられる。

しかし、この島にかかる遺宝をはこび、この島を神島として守ってきたのは宗像君の領域にある宗像および大島沿岸の漁民の人たちであった。私どもは今もその信仰が脈々として伝えられていることを感ずるのである。



三笠宮殿下を囲んで参加隊員一同

調査期間中に遠路はるばる現地御視察を賜わり、御指導・御激励をいただきました
三笠宮殿下をはじめ諸先生方並びに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

今回の調査に参加された方々は次のとおりであります。長期にわたり困苦欠乏・重労働
に耐えて整然たる調査活動を進め、着実に立派な成果を挙げられました。ここに厚く感謝
いたします。

第1回予備調査（昭和44年4月）

出光泰亮 小野雅一 松見守道 末松直介
日隈 徹 吉村政義 岩本仁太郎
宇都宮弴 齋藤 惇 佐藤市五郎

第2回予備調査（昭和45年5月）

岡崎 敬 小田富士雄 佐田 茂 松本 肇
出光泰亮 井上団平 小野雅一
松見守道 末松直介
日隈 徹 吉村政義 富永武昭 山野清信
宇都宮弴 齋藤 惇 佐藤市五郎 谷川伊藤 吉武貞夫 十時 元

第3次第1回調査（昭和44年10月）

岡崎 敬 小田富士雄 佐田 茂 松本 肇 黒野 肇
橋 昌信 伊藤奎二 柳田康雄 與子田 寛 光枝房敏
松見守道 井上団平 石塚正治 阿久井長則 山本政東 中倉民男
末松直介 米山芳夫
日隈 徹 吉村政義 亀田 満 興侶武光
宇都宮弴 齋藤 惇 吉武貞夫 谷川伊藤 吉田重三郎 木藤隆三

視 察

三笠宮殿下

森田 実 渡辺正気 藤原 正 羽立 誠
小山富士夫 松本雅明 広田安雄
石田正実 松尾梅雄 内田 澄 末松良介
久保輝雄 十時 元

